であり、盲目だからこそ、理性の導きが必要だ。しかし、理性が感情を導くと云ふことは、理性が感情と入れ代ると云ふことではない。情意はあくまでも生活の實體で、理性はその嚮導者だといふことを、吾々は決して忘れてはならない。理性が生命を自由ならしめると云ふのも、つまりは盲目な情意に眼を與へ、光を與へるからなんだ。

青年　よく解りました。ところで敬の感情が、本來、自己以上のものに對する感情だとしますと、自己と同等なものや、自己以下のものに對しては、敬の感情なんか、どうでもいゝと云ふことになりませうか。

主人　大切な質問だ。實はその點について、少し話をして置きたいと思つて居たところだ。敬が本來自己以上のものに對して起る感情であることは、無論間違ひのないところだ。ところで、自己以上のものとは何か、と云ふことをしみじみ考へて見たら、それは單に、先生や、親や、君主や、聖賢や、神のみに限らるべきでない、と云ふことに氣がつくだらう。一切は大いなる力の顯現だ。一木一草と雖も、莊嚴な眞理の體現ならざるは無い。自己の生命以下だ、と平氣で云ひうるやうなものが、一つとしてこの世界にあるだらうか。本當に心を虛うして、この大自然に對して見たまへ。恐らく、一切のものは自己以上のものに思へるだらう。況んや人間の

生命をやだ。

青年　なるほど、さう云ふ點には、氣がつきませんでした。

主人　だが、崇高な理性の導きなくしては、さうした謙虛な心には、なかなか成れないものだ。だから、何度も云ふやうだが、理性を磨くことは極めて大切だ。眞の意味で理性が光つて來れば、吾々はどんな凡庸な人間に對しても、どんな幼少な者に對しても、又、狂人や、白痴や、惡人に對してすらも、敬虔な心持をもつて接することが出來るものだ。そして、そこまで進んだ時に、敬の感情は眞に道德的に完成された、と云へる。

六、感情生活の均齊

青年　色々お話を伺つて居りますと、羞恥感も、愛情も、敬の感情も、その理想的な現れに於ては、全く同一な働きをするものゝやうに思へますが……。

主人　修養の極致に於ては、崇高な理性に統一された、一枚の自由な心境があるのみだ。だが、さうした心境を開拓するのは容易でない。やゝもすると、一方に片よつて、愛のない冷やかな克己家になつたり、素行の修まらない親切者になつたり、或は異端者を虐げる信心家になつた

りするものだ。だから、お互に氣をつけて、なるだけ片よらない修養をして行くことが大切だね。さつき私は、一行に通ずる者は萬行に通ずる、と云つたが、それは決して、一行だけを修めよ、と云ふ意味ではない。何と云つても、均齊のとれた修養に越した事はないからね。

青年　ところで、色々のことに氣を配りすぎて、蚊蜂取らずの、凡庸な人間になり終ることもあるやうですね。

主人　それもさうだ。だが、世の中には、平均のとれた人間を凡庸と見、畸形的な人間を天才だと見る傾向もないではない。一體人間は、羞恥と愛と敬の三邊で出來て居る三角形のやうなもので、どの邊も延びるほど、その面積は擴がるものだ。ところが、底邊の短い、面積の狹い、鋭角三角形のやうな人間の方は、どうかすると天才的に見え、面積は廣くても、正三角形のやうな人間は、とかく凡庸に見える。若い者が奇拔な眞似をして喜ぶのも、多くはさうした認識不足から來て居るやうだ。

青年　なるほど、さう云ふ事も、たしかにありますね。

主人　一體、眞の偉大さは、天才的の閃きを乘り越えるものだ。鋭角的に見える偉人は、まだ眞の偉人ではない。むしろ、鈍角的な感じを與へ、接する人に、一種の氣安さを感じさせるやう

でなくては、本當の偉大さがあるとは云へない。もし、更に進んで、大きな圓の感じを與へるやうになれば、その人の偉大さは眞に理想的だ。

三つの感情の、均齊のとれた發達によつて、はじめて得られるものだ。そして、さう云ふ偉大さは、羞恥、愛、敬の

青年　やはり、圓滿、均齊が德の最高なるものですかね。

主人　人間が、それぞれに特異性を持つことは必要だが、人間としての基礎的な感情が平均を失ふと、道德的缺陷を暴露せずには居ないものだ。支那に天地人と云ふ言葉があり、西洋に自然、人生、神、と云ふ言葉があるが、ある人は、羞恥は「地」、卽ち「自然」に對する德で、愛は、「人」、卽ち「人生」に對する德の基礎をなし、敬は「天」、卽ち「神」に對する德で、宗教生活の源泉であり、敬は「天」、にも社會にも眞の道がある、と云つて居るが、この三つが綜合統一されるところに、個人人生、神の三界に通ずるものでなくては、眞の道とは云へない。天地人の三才を貫き、自然、全くその通りだ。

青年　よく解りました。

主人　感情について話せば、まだまだ色々あるだらうと思ふが、今夜はこの位にして置かう。要するに、どんな感情でも、高い理性の導きによつて、其の方向を正し、それが十分に心の底に

燒きついて、所謂、道徳的、宗教的の情操になつて行けば、生命は潑溂たる力を以て、自由の境地に進むことが出來るものだ。だから、くれ〴〵も感情を殺さないで、それを正しく生かすことに努力しなければならない。

青年　どうも有がたうございました。お暇いたします。

主人　ではお休み。

〔摘　要〕

一、生命が自由への進展をなすには、感情の力が充分でなければ成らない。理性は、それが單なる理性である限り、無力である。それは、感情にまで燃燒する時に、はじめて眞の力を得る。知行合一とは、即ち、理性が感情にまで燃燒した境地を指すのである。而して修養とは、かくの如き感情、云ひかへると、情操を養ふの謂である。

二、だが、自然感情と情操とは、決して本來別々のものではない。すべてのよき情操の芽生は、自然感情の中にある。理性が感情にまで燃燒すると云ふことは、自然感情を理性の光によつて、正しく導き養ふの謂に外ならない。

三、自然感情の一である羞恥感は、人間の內部に存する人間的ならざるもの の暴露を恥づる感情である

知＝理性
行＝感情

が、自己の無價値、弱點を、單に人前だけでなく、自己自身の前に、神の前に、又理想の前に恥づるに至つて、眞に價値ある道德的情操となる。羞恥感は克己修德の基礎をなすものであるが、その方向を誤る時、恥づべきを恥ぢず、恥づべからざるを恥づるに至る。故に羞恥感の正しき涵養には、內省による鋭き自己批判を最も必要とする。

四、羞恥感が、人格の尊嚴を確立せんとする感情なるに對して、愛情は、自己と他人とを融合せしめ、自他の區別を撤せんとする感情である。この感情は、心理的には、自己の生命にとつて價値あるものに引きつけられる感情なるが故に、これを正しく導くためには、先づ自己の生命についての觀念を正さねばならぬ。動物的、感覺的慾望を、自己の生命の主體であると考へる時、その愛は、必然的に利己的、盲目的となる。眞に理想的なる愛は、人類我や宇宙我に眼覺めたる者によつてのみ發輝される。理想的なる愛は、他人の人格を手段とせずして目的とするものなるが故に、決して偏局することがない。性愛は一人對一人に偏局する事が道德的であるとせられるが、それは、必然的に動物的欲求を伴ふからであつて、これとても博愛と同樣に、相手の人格を目的とする清い感情を、その基調としなければならぬ。

五、敬の感情は、自己以上のものに歸依せんとする感情である。生命の本源、宇宙の最高權威、圓滿、完全等にあこがれる心のある限り、この感情は人間にとつて自然である。權威に對する敬の感情を、迷信なりとして却くる者もあるが、それは智識迷信である。生きたる眞理は、論理の示すところに在らずして、却つて情意の指すところにあることを思はねばならぬ。敬の感情なきところ、社會生活に於て中心が失はれ、精神生活に於て理想が失はれる。尙、この感情は、人間が心を虛うして万象に對し、一切が宇宙大生命の顯現なる事を味得する時、一見自己以下なりと見ゆるものに對しても、發輝される。かくの如く、自己以下なる者に對しても、敬虔の心を以て接し得るに至つて、敬の感情は眞に理想的である。

六、人間は、羞恥、愛、敬の三つの感情を三邊とした三角形の如きもので、三邊の成長は、やがて人間と

しての偉大さの成長である。もし三邊が、たゞ一つの心境に統一されて、大いなる圓を描くに至れば、その偉大さは眞に理想的である。鋭角的なる畸人を天才と思ひ誤つては成らない。人間の眞の道は、地に對する德、人に對する德、天に對する德、即、上述の三感情の無縫の統一によつて達成せられる。而してかくの如き道の體現者にして、はじめて眞に天才の名に値し、偉人の名に値する。

第七夜——生活態度を語る

一、生存と所有と表現

主人　話を始めてから、もう幾晩になるかね。

青年　今夜で恰度七晩です。

主人　もうそんなになるかね。では、人間の本質についての話は、一應これで切りあげて、今夜は生活態度と云つたやうな話に移るかね。無論これまでの話だつて、生活態度の話でないことは無かつた。だが、今夜は、自我がどうの、理性がどうの、感情がどうの、と云つたやうな心理的な見方からでなく、實際生活に於て、何を目あてにして生きて行けばいゝか、つまり、吾々の意志決定の大眼目と云つたやうなものを、探し當てゝ見たいと思ふんだ。

青年　結構ですね。實は、僕達にとつては、それが一番大切なんです。

主人　と云つても、昨夜まで話したやうな、人間に關する基礎的な理解が無くては、實際生活の目あては決められないんだ。

青年　それは無論さうでせう。

主人　そこで、生活と云ふ言葉の意味だが、人間は先づ食はなければならない。「食ふ」といふことは、生活と云ふ言葉から、どうしても切り離せない問題だね。

青年　云ふ迄もありません。そしてそれが僕達のさしあたつての最も痛切な問題なんです。

主人　ところで、その問題は、詮じつめると、個々の人の心の持ちかたと、社會乃至經濟組織の如何によつて、解決されることだね。

青年　さうです。だから、その經濟組織を何とかしなければ成らんと云ふのが、今日の青年の頭にこびりついて居る問題なんです。

主人　無理もないことだ。いづれはさうした方面の事も、お互に篤と考へて見なければ成るまい。だが、それよりも先づ、個々の人の心の持ちかたの方から、考へて見る必要はないかね。つまり、吾々の日常の生活態度と云つたやうなものを。

青年　それは考へて見なくても、大抵解つて居るんです。

主人　さうかな。どう解つて居るんだい。

青年　結局は、勤儉力行とか、自主獨立とか、自力更生とか、云ふことに落ちつくでせう。

主人　もうそんな事は聞き飽いた、と云ふのかね。

青年　解り切つたお題目だけを並べて、かんじんの經濟組織の方を放つたらかされたのでは、何時になつても、滿足に食へる氣づかひは無いと思ひます。

主人　それはさうだ。だが君は、お題目の意味がよく解つて居るかね。

青年　讀んで字の如くぢやありませんか。

主人　文字通り實行もして居る、と云ふんだね。

青年　無論です。怠けてなんか居られやしません。それこそ、明日にも食へなく成りますから。

主人　さうか。君のことだから、無論怠けては居ないだらう。だが、その勤儉力行を、案外、蜘蛛や蟻見たいな心持でやつて居るんではないか、と心配するね。

青年　それはどう云ふ意味なんです。

主人　蜘蛛と云ふ奴は、雨にも風にもめげないで、偉い努力をやつて、巧みに巢を張るね。だが、一通り自分の安住の場所を得ると、それからあとは、その眞中にぢつと蹲んで、偶然に飛び込

んで來る昆蟲を捕へて生きて居る。これを偶然を食つて生きると云ふんだ。君の勤儉力行の奥のどこかに、そんな氣持が巢喰つて居やしないかね。

青年　安樂を目あての勤儉力行をやつて居るんだ、と仰しやるんですか。

主人　こないだ、人間苦の話をした時の口振から推すと、さうでは無いかと思ふが、どうだね。

青年　なるほど、さう云はれると、まだ、何處かに、さうした氣持が殘つて居るやうな氣もしま す。

主人　幾分でもそんな氣持が殘つて居ると、君の勤儉力行も、まだ本物では無いね。第一、そんな氣持の人があまりに多過ぎるから、經濟組織がうまく行かないんだ。結局、社會は個人の集團だからね。

青年　なるほど。

主人　それから、蟻といふ奴の勤儉力行も、あまり感心出來ないんだ。

青年　蟻は、蜘蛛とは隨分ちがつて居るではありませんか。

主人　そりやちがつて居る。蟻は怠けることを知らない奴でね。だが蟻の勤勉は、私に云はせると、不淨な勤勉だ。

青年　不淨な勤勉ですつて？

主人　さうぢやないか。ビスケットの屑や煎餅のかけらはいゝとして、蜻蛉の死骸やら、蚯蚓の切れ端やら、甚しきは便所の中の蛆虫まで、自分達の倉庫に引きずり込むんだからね。

青年　でも蟻にとつては、それが立派な食糧になるんですから、いゝぢやありませんか。

主人　そりや蟻自身にとつては、それでいゝさ。だが蟻は譬へなんだ。もし人間の勤儉力行が、蟻見たいに、無選擇な掻き集め主義になつたらどうだらう、と云ふんだ。

青年　それは無論いけませんね。

主人　ところで、今日の勤儉力行と云ふ奴が、とかくさうした傾向を持つて居るので困る。その氣持が直らない限り、どんなに組織を改めたところで、人間が全部安全に食つて行く事はむづかしいよ。物の所有が人生の目的である限り、結局人生は奪ひ合ひだからね。

青年　すると、どう云ふ心持で居れば、本當の勤儉力行になるんでせう。

主人　蜜蜂の生活を學ぶんだね。蜜蜂は、物を集めるにしても、美しい花園の中から、香氣の高い、清らかな蜜だけを集める。しかも、その集めた蜜をそのまゝ貯へると云ふのではなく、それに自分の生命の力をそゝぎ込んで、新しい蜂蜜と云ふものを創造するんだ。勤儉力行も、こ

の創造と云ふ事を目標にするやうになつて、はじめて本當の勤儉力行と云へる。そして、萬人が眞にそこに目を覺まして、努力奮闘するやうになれば、社會組織なんか少々惡くても、食ふことを心配するやうな事は、先づ無く成るんだ。食へるとか、食へないとか云つて騷いで居るのは、皆んなが所有の生活に停滯して居るからなんだ。

青年 なるほど。しかし、現在食ふに困つてゐる人間は、そんなのん氣なことでは、承知出來ませんね。

主人 それはさうだ。だから、組織も適當に改めなくては成らんさ。だが、永遠のことを考へると、心の改造がもつと根本的なんだ。組織を作るものは、要するに人間の精神だからね。

青年 でも、反對に、組織が人間の心を作る、とも云へるでせう。

主人 それは云へる。しかし、組織にのみたよるやうな人間では、結局、又その組織のために窒息することになるんだ。度々云つた通り、生命の價値は、その自由な流動にある。精神は常に自主的、創造的でなくては成らない。さうあつてこそ、組織も立派なものが出來、そして生命と共に、絶えず更新することが出來るんだ。

青年 なるほど。

主人 そこで、話が又理屈つぽくなつて來るが、もう少々その事について話して見よう。一體、人間の活動をそのねらひ所によつて分けて見ると、大凡三つの段階があるやうに思ふ。その第一は「生き永らへること、」その第二は「所有すること、」その第三は「表現すること、」なんだ。無論、この三つはお互に入り組んで居て、嚴密な意味では、區別は出來ない。だが、生き永らへるために、所有したり、表現したりする人間と、表現するために、所有し、生き永らへる人間と、所有するために、生き永らへて表現する人間とは、全然その生活態度がちがつて居る。

青年 つまり、蜘蛛と、蟻と、蜜蜂との違ひなんですね。

主人 さうだ。で、目標を生き永らへることに置いて居る活動は、それが如何に複雜なものであつても、要するに、動物や植物と共通な、自然生活以上の何物でもない。その人間にとつては、たゞ生き永らへることだけが價値であり、從つて、自分の生存のために行ふすべての行爲は善だ、と云ふことになる。そこには、本當の意味での精神の自由もなければ、道德も無い。たゞ彼を支配する最後のものは、必然の法則だけなんだ。

青年 成るほど、さうなると、人間も腦髓を持つた機械に過ぎませんね。

主人 うむ、仲々うまいことを云ふね。そこで第二の所有を目標にする生活だが……

青年　先生、所有を目標にする生活なんてものがありませうか。元來所有は生存の手段なんですから、生存よりも所有を重く見るやうな生活は、理屈の上からは、あり得べからざる事ですし、又、實際誰だつて、生き永らへる必要があればこそ、所有したいとも思ふのです。

主人　理屈はさうだ。だが、人間は折々目的と手段とを取りちがへて、平氣で居るものなんだ。

青年　それは、さう云ふことも無いとは限りませんが……

主人　限りませんが、どころぢやない。新聞の三面を、少し注意して見て居ると、そんな例はざらに出て來るよ。ことに財物の所有は享樂と大いに關係があるので、餘計に眼が眩むのだ。許されて生きると云つたやうな、つゝましい心持で生存を欲して居る間は、大丈夫なんだが、享樂の妖にかゝると、財物の所有のみが一切を解決するやうな氣がして、まつしぐらに、所有へと突進して行きたくなるものだ。

青年　なるほど。

主人　さうした生活の正しいものでないことは、更めて云ふまでもないだらう。試みに、獲得と所有とに夢中になつて居る人に尋ねて見るがいゝ。「貴方は何のために働いて居らつしやるか。」つて。するとその人は、恐らく得意になつて答へるだらう。「仕事をするのが面白いんだ。」と。

だが、その仕事と云ふのが、何を意味して居るかは、その儲けた金を、文化事業にでも寄附するやうに勸誘して見ると、わけもなく明瞭になるだらう。そこで、それとなく話頭を轉じて、「そんなに金を儲けてどうなさるんですか。」と尋ねて見る。するとその人は、「君、金がなくて飯が食へるかい。」と、やゝ怒氣を含んで、答へるだらう。そしたら、すかさず、「何のために御飯をめし上るんですか。」と、思ひ切つて尋ねて見るがいゝ。恐らくその人は、「飯を食はなくて生きられるか。馬鹿！」と、呶鳴りつけるだらう。呶鳴りつけられても構はぬから、もう一度、「貴方は何のために生きて居らつしやるか。」つて、尋ねて見るんだね。その人はすつかり怒つて仕舞つて、或は答へないかも知れない。或は「わかつて居るぢやないか、仕事をするためだ。」と、本當に解つて居るつもりで、答へるかも知れない。もしさう答へたら、出來るだけ穩かに「何のために仕事をなさるんです。」と、もう一度尋ねて見るんだ。その人の心の中には、恐らく、金儲けの事しか浮んで來ないだらうが、屹度返事にまごつくだらう。

青年　今夜は、先生、いやに皮肉ですね。

主人　皮肉に聞えるかね。だが、所有生活に夢中になつて居る人間にとつては、働くのは金のため、金は食ふため、食ふのは生きるため、生きるのは働くため、働くのは金のため、金は……

青年　先生、もう解りました。

主人　解つたか。解つたら止さう。とにかく、同じ輪をぐる〳〵廻つて、止まるところを知らない生活哲學に生きて居るのが、彼等なんだ。尤も蜘蛛見たいに、偶然を食つて生きて居るやうな生活に比べると、自主的、活動的な點に於て、多少取り柄が無いでも無い。しかし所詮は、物と肉體との關係以上の何物でも無い。そこから所謂文化と云ふものが生れるとしても、それは却て人間の眞生命を蝕み、人類を爭鬪に導く原因になるに過ぎないんだ。

青年　なるほど、さう仰しやると、今日文明の利器だと云はれて居る機械の多くは、却て人間の自由を束縛し、精神を蝕んで居るやうですね。

主人　すべてが所有欲のためにだけ、利用されるからだ。發明者の心は、必ずしもさうではなかつたらうと思ふがね。

青年　すると、發明や發見も考へものですね。

主人　すべての人が、發明者や發見者の尊い心持に成れば、問題はない。

青年　と、申しますと？

主人　つまり、生活の目標を、單なる生存のための物の獲得所有に置かないで、自己の

生命力を表現すると云ふことに置くんだね。表現はやがて創造であり、創造はとりも直さず奉仕なんだ。だから、表現を目あての生活は、奪ふ生活でなくて、與へる生活なんだ。みんなが與へるために必要なものだけを、他から與へて貰ふ。さう成つて、はじめて社會組織も經濟組織も、完全なものが出來上る。要するに、個々の人の生活態度が、すべての基礎なんだ。

青年　しかし、そこまで行くには、前途遼遠ですね。

主人　前途遼遠でも仕方がない。急ぐと碌なものは出來ないよ。慾得づくで作つた組織なら、また慾得づくですぐ破れるんだからね。で、破れない組織を作るためには、どうしても物と人との關係をはつきりさして、ゆつくりと、根本的に人間の生活態度を正す必要がある。

青年　物と人との關係と云ひますと？

二、人主物從

主人　それは、理屈の上からは、別にむづかしいことではない。簡單に云へば人主物從、つまり、人が物のために働くのでなく、物を人のために働かせると云ふ、極めて平凡なことなん

だ。

青年　その位のことなら、誰だつて解つてゐるでせう。

主人　解つて居る？　成るほど解つて居るつもりかも知れん。だが、人主物從を生活の上に眞に實現して居る人は、さうざらにあるものではない。

青年　そんなに難かしい事なんでせうか。何でもないことのやうに思ひますが。

主人　理屈はやさしいが、實現はなかなか難かしい。その實現が出來さへすれば、それだけで、世の中は大體うまく行くんだが、うまく行かないのは、要するに、人主物從が徹底して居ないからなんだ。解つて居るつもりの君だつて、實はどうかと思ふね。

青年　自分では大丈夫だ、と思つて居ますが……。

主人　物に使はれないで、物を使つて居る、と云ふ確信が本當にあるかね。

青年　あるつもりです。

主人　あれば結構だ。ところで君は、カーネギーの工場に働いて居た或る職工の話を、聞いたことがあるかね。

青年　どんな話でせう。

主人　何でも、素晴らしい腕前を持つた職工だつたらしい。その職工が居たために、その工場の製作品が、世界的に有名になつた、とまで云はれて居る位でね。實は何を作る工場で、何と云ふ名前の職工だつたか、忘れてしまつたが、話の肝腎な點だけは覺えて居る。……ところで君、カーネギーの名は聞いたことがあるだらう。

青年　えゝ、亞米利加で有名な實業家だつたんでせう。非常に正しい、人道的な……。

主人　さうだ、流石はカーネギーで、早くからこの職工に眼をかけて居た。そして其の職工が相當の老齡に達すると、ある日自分の室に其の職工を呼んで、「君も隨分永い間私の工場のために働いて呉れて、お蔭で工場もこの通り立派なものになつたが、私の君に對する責務は、まだ充分果されて居ない。實は、今日今からそれを果さうと思つてゐる。」と云つて、一枚の厚い紙片をその職工に差出した。職工は不思議に思つて、それを開いて見ると、それは重役任命の辭令だつたさうだ。どうだい君。職工は飛び上つて喜んだだらうね。

青年　それは喜んだでせう。

主人　君でも、そんな風に待遇されたら、嬉しいだらうね。

青年　それは嬉しいにきまつて居ます。

主人　ところが、その職工は、喜ぶどころか、非常に落膽したさうだ。

青年　どうしたと云ふんでせう。

主人　この職工には、物と人との關係が、本當の意味で解つて居たんだね。

青年　と申しますと？

主人　それは、この職工が、その時、カーネギーに對して云つた言葉を聞けば、よく解る。彼はかう云つて居るんだ。「私は人間らしい生き方をしたいと思ひます。私は物や、物の奴隷に成りたくはありません。そして、私が職工として勤めさして戴く限りは、私は人です。死ぬまで人であることが出來ます。と云ふのは、私は職工として働いてこそ、私の生命を、自由に、悦びに充ちて使用することが出來、同時に、人生に役立つことが出來ると思ふからです。しかし、もし私が重役にならなければ成らないとしますと、私は今日から物です。少くとも物の奴隷です。私は重役としては、經驗もなく、無論自信もありません。私は無爲にして暮すより外に、方法が無くなります。私は生命の自由と悦びとを失ひ、しかも人生に何の貢獻もせずに、今日から暮らさねば成らないでせうか。社長さん、お願ひです。もしこの辭令をお返しすることが、工場のために、又亞米利加と世界とのために、非常な害惡でなければ、どうか私の生命のために、これをお返しすることをお許し下さい。」——さう云つて、彼はカーネギーの前に跪づいたさうだ。

青年　へえ……感心ですね。

主人　流石のカーネギーも、これにはすつかり頭が上らなかつたらしい。そして、其の職工の手を執つて、叫んで云ふには「許して呉れ、許して呉れ。私の人生に對する今日までの考へは、すつかり間違つて居た。私は、人と物とを取りちがへないつもりで、實は取りちがへて居たんだ。私が物の奴隷であつたればこそ、君までも物の奴隷に陷れようとした。だが、惡意は無かつたんだ。たゞ君をそれほど立派な人と知らず、また、私自身、これほど無智な人間と自覺しなかつたために、起つた間違なんだ。君の職工としてのこれまでの立派な働きが、何處から力を引き出して居たかも、今はよくわかつた。どうか今後もその精神で、快よく工場に働いて呉れ。」さう云つて、カーネギーは、秘書を呼んで、卽座に辭令を書き代へさした。新しい辭令には、單に職工の俸給だけが記されて居たが、それは大統領と同一の俸給だつたさうだ。

青年　へえ、偉い人間が集まると、僕達の想像もつかないことをやるものですね。

主人　善い事をやつてのける自由さは、まるで天馬空を行くが如しだね。だが俸給のすばらしさ

に呆氣にとられて、物と人との關係を忘れてしまつてはいけないよ。

青年　いや實際、僕もカーネギーと同様に、これまで物と人との關係が、本當には解つて居ませんでした。

主人　とうとう白狀したかね。だが、「カーネギーと同様に」は、振つて居るね。

青年　恐れ入ります。

主人　そこで、一つ君にいゝ言葉を紹介しよう。それは「仁者は財を以て身を發し、不仁者は身を以て財を發す。」と云ふんだ。これは儒教の經典たる「大學」の中にある文句だが、意味は解るだらう。

青年「財を以て身を發す。」と云ふのは、人主物從、「身を以て財を發す。」といふのは、その反對でせう。

主人　さうだ。つまり、人格の自由な活動と向上とのために、物を使用するのが仁者で、それを逆に行くのが不仁者、と云ふわけなんだ。それについて、一つ面白い話がある。それは、ある禪僧の話なんだが、或る人が、その坊さんを困らしてやらうと思つて、自分の家に招いて鯉の料理を出した。そして、どうするかと思つて見て居ると、その禪僧、一向平氣で、刺身だらうと、吸物だらうと、さつさと平げてしまふ。そこで主人が、「この頃は、御出家も隨分文明になつて、私共も氣が置けなくなりました。」と皮肉つて見た。すると、その禪僧は、「鯉も拙僧の腹中に入つて、見事に成佛したことで御座らう。」と答へたさうだ。

青年　ひどい坊さんですね。

主人　ひどい坊さんと云へば、ひどい坊さんだが、考へやうでは、物事に捉はれない禪僧の一面を物語る話として、一寸面白いぢやないか。ことに、鯉を成佛させる、と云ふ考へがいゝね。吾々は、いつも、物を成佛させると云ふ考で居なくては成らない。成佛させるとは、殺すことでなくて、宇宙人生の進展に奉仕させる事なんだ。卽ち徹底して生かすことなんだ。一切を成佛させ、そして人間自ら成佛する。これが人間の仕事なんだ。この點がはつきりして居れば、みだりに天物を暴殄するのも惡いし、かと云つて、ただ〳〵物の前に跪づくのも惡い、と云ふことがわかるだらう。

青年　つまり、人間は、その生命力の表現によつて、宇宙人生の完成のために奉仕する、そしてそのためには、一切の物を人間のために生かして使はなければならない。と、かう仰しやるんですね。

主人　さうだ。

青年　わかりました。ですが、そうした考へ方には、隨分人間本位な我儘が、這入つて居るんではありませんか。

主人　君は米を食つたり、病菌を殺したりすることを、君の良心に恥ぢるかね。

青年　そんな事はありませんが……。

主人　では、問題はないぢやないか。その事は、すでに、「宇宙力」の話の時にも云つた通りで、結局人間は、人間の最高と信ずる道を進むより外にないんだ。「完全」への誠を以つて進んで居る道なら、それでいゝだらう。人間が、その正しいと信ずる目的のために、毒蛇を屠り、石炭を掘り、稻を刈り、魚を獲ることは、當然許さるべきだ。吾々は、良心の命令によつて動くより以上の、善い生き方を知らないから、かりに、もつと善い生き方があるとしても、それはどうにも成らない。元來良心に恥ぢない事まで、色々と詮索することは、人生に何の利益もない知的遊戯だ。君だつて、そんな事を眞劍に考へて居るわけでは無からう。

青年　實は、一寸疑問が起きたものですから、つい……。

主人　人生を考へるには、議論の遊戯にならないようにしなくては成らない。……では、物と人

との關係は、大體これでいゝね。

青年　えゝ、よくわかりました。

三、生命力の表現と職業

主人　そこで、人間の生活目標は、單なる生存でもなく、物の所有獲得でもなくて、自由なる生命力の表現であり、そして、物は常にこの目的のために奉仕すべきものである、と云ふことが解つたわけだね。

青年　わかりました。

主人　さうすると、お互の職業と云ふものも、自然その目標に合致すべきで、それは單に生活費獲得の手段でない、と云ふことが解るね。

青年　わかります。しかし、生命力の表現なんて、そんな難かしい事を自覺して、職業をやつて居る人は先づあるまい、と思ひます。

主人　ところが、考へやうでは、人間は心のどこかで、ある程度まで、皆その事が解つて居るんだ。

青年　解つて居るんですつて？

主人　さうだ。明瞭に自覺して居ないだけで、實はよくわかつて居るんだ。何と云つたつて、それが人間としての本然の願なんだからね。

青年　さうでせうか知ら。今夜は、先生はいやに人間を上げたり下げたりなさるやうですね。

主人　何も皮肉を云つて居るつもりぢやないよ。一體君は、君の力で作つたもの——米でも、品物でも、其他何でもいゝが——それを誰かゞ、質が悪いとか、出來がまづいとか、惡口を云つて居ると聞いたら、どんな心持がするかね。

青年　心持よくありませんね。

主人　それは、品物の値段や、賣行きに影響するからかい。

青年　それもありますが、そればかりではありません。

主人　そればかりではない、と云ふのは？

青年　とにかく、一種の侮辱を感じますね。

主人　君自身、その品物に自信がないとしたら、恥しくも思ふだらう。

青年　無論さうです。

主人　その侮辱感なり、羞恥感なりは、物質欲とは大して關係のない、君自身の人間的生命がうけるところの感じではないかね。委しく云ふと、君自身の生命の表現が、不當に評價されたか、もしくは、その表現が實際につまらなかつた、と自覺した場合に、起るところの感じではないかね。

青年　さう云はれると、さうです。

主人　そしてそれは、損得の問題以上に大切な問題ではないかね。……無論、全然人間的な良心を失つて居る人達だと、別だが。

青年　當り前の人間だつたら、先生の仰しやる通りでせうね。

主人　さう考へて來ると、人間は案外正直なんだ。心の奥底では、職業の本當の意味が解つて居るんだ。たゞそれが日常生活に於て、表面に現はれて來ないので困る。日常生活に於ては、本當の願が押しつぶされて、第二義以下の願が、とかく、のさばりたがるものなんだ。人生は、その本質に於ては、決して惡いものではない。たゞその本質が、いつも、奥の方にかくれたがるのが惡いんだ。そこで吾々は何時も、その第一義的なものを、明るみに引つぱり出す工夫をしなければ成らない。それが、人間の成すべき仕事の最も大切な部分なんだ。それが出來る

と、あとはひとでに明るく伸びて行く。生命の創造と云ひ、生の實現と云ひ、言葉は色々あるが、要するに、人間の第一義的な願に目をさまし、その願に從つて進んで行くことなんだ。それがなければ、千の工夫も、萬の實行も、それは生命の實現でも、創造でもない。職業についての觀念の正否も、そこに基礎を置くか否かによつて、きまるんだ。

青年　すると、職業を生活費の問題と關聯させることは、間違ひでせうか。

主人　間違ひだとは云へない。いや、むしろ、生命力表現の問題と生活費の問題とを、切り離して考へることが間違ひなんだ。吾々は、眞面目に生命力の表現をやつてさへ居れば、當然活かして貰へるものだ、と確信すべきだね。人生の進展に貢献する仕事を眞劍にやつて居て、絶對に飯が食へないと云ふことは、實際に於て先づ有り得ない。多くの場合、人々は食はんがためにのみ働くから、却て食へなくなるんだ。皆んなが、食ふことを直接の目的にしないで、眞劍に自分の生命の創造と表現とをやりさへすれば、少くとも、人生に餓えると云ふことだけは無くなる、と私は思ふ。國と國、人と人とが、物欲のためにお互にせめぎ合つて、却て自ら餓え て居ると云ふのが、今日の有様だ。國家は、國民の生命力表現の綜合によつて、人類文化への奉仕をやるためにのみ必要であつて、略奪と商取引のために必要であるのではない。一家の職

業だつて、それと同じだ。

青年　話はちがひますが、先生は、廢娼問題をどうお考へですか。

主人　無論廢止に賛成だ。私はあんな仕事を職業だとは認めて居ない。あれは生命の表現とは最も縁遠い、いやむしろ、物欲のために生命を殺戮して行く仕事なんだ。國家の名に於て、あれを一つの職業として認めて居ると云ふことは、人生に對する反逆だとすら思ふね。

青年　しかし、あれを廢すると、もつと害悪がひどくなる、と云ふ説もありますが……。

主人　害悪を擴げないための、一つの神聖な任務を持つて居る、とでも云ふのかね。

青年　神聖だなんて、誰も云やしません。

主人　でも、さう云ふ説の人は、宗教家や、防疫官や、さう云つた人達の仕事と、その精神に於て、あまり違はない仕事のやうに、見て居るんぢやないかね。

青年　まさか。

主人　しかし、詮じつめると、さうなるから仕方がない。それは、或は廢娼の結果、面白くない現象が起るかも知れないさ。しかし、國家の名に於て、人身賣買を正當視して居るのは、もつと恐ろしいことだ。國家が、國民と國家自身との正しい生命力の表現のためにのみ、存在して

居る限り、明瞭にそれに反する事柄を、一の職業として、その國家内に認めて居るのは、何としても大きな矛盾だらう。君は、さうは思はないかね。

青年　それは思ひます。しかし、それを廢するとなると、もつと害毒が擴がる、と云ふやうな說を聞きますと……。

主人　職業が生命力表現の手段であり、人生創造への奉仕である、と云ふ原則の前には、そんな功利的な考へを容れる餘地はない。何が害惡だと云つても、生命の原則を、正面から、國家の名に於て破るほど、大きな害惡はない筈だ。もし人肉賣買が、そんな功利的な考へから、正業と見なされうるなら、泥棒だつて、富の分配の不公平を、いくらかでも緩和する、と云ふ立場から、正業と認めて差つかへないことになるだらう。とにかく、物欲だけを目標にした活動は、職業と認めるわけには行かない。職業と云ふ以上、何としても、それは、生命力の表現による、人生への奉仕でなくては成らない。多くの職業は、事實さう成つて居るんだ。たゞ、各人の自覺の程度に差違があるだけでね。

青年　職業を墮落させる主なる原因が、物欲にあることは仰しやる通りですが、世間の所謂偉い方々の中には、もう一つ、名譽欲と云ふものをその上につけ加へて、隨分職業を墮落させて居

る人もあるやうに思ひますが……。

主人　君の言ふ通りだ。自己の生命力を、實人生そのものの中に表現することを忘れて、一途に他人の認識の中に刻みつけやうとあせる、所謂名士なるものが、世の中を毒して居ることは、實際想像以上だね。

青年　有名になることだけを、一生の仕事にして居るやうな人もありますね。

主人　ある。たしかにある。だが、お互だつて、その點では滅多に安心は出來ないぜ。一體、人を讃めると云ふ事は惡い事ではないが、讃められる側から見ると、必ずしもそれはいゝ結果ばかりは生じない。つい、「讃められたさが一杯」で、仕事をやるやうになるものでね。だから、ほめられた場合こそ、餘程警戒する必要がある。それについて、アンデルゼンと云ふ人の書いた卽興詩人と云ふ物語の中に、面白い話がある。それは一人の少年が、毎日聖母マリアの像の前で、眞心こめてお禱りをして居た。ところが、或日一人の旅人が、そのお禱りの聲をきいて、「あゝ美しい聲だ。」と讃めた。するとその翌日から、その少年は、自分の美しい聲を、誰か聞いて呉れるものがありはしないかと、そればかりが氣になつて、眞心のこもつたお禱りが出來なくなつてしまつた、と云ふのだ。

青年　なるほど、考へさせられる話ですね。

◎主人　お互、讃められて一生を棒にふらないやうに、氣をつけたいものだね。その點になると、流石は西郷南洲だ。「金も名も命も要らないやうな、始末に終へぬ人間でなくては、大事を共にするに足りない。」と云ふやうな事を彼は云つて居るが、彼自身が、たしかに評判や利害を超越した人物だつたらしい。さう云ふ人になると、どんな職業をやつて居ても、たゞ爲すべきことを爲さう、と云ふ誠があるばかりで、所謂職業意識なんか、全く超越して居るんだ。

青年　さうした心境まで進むのは、吾々凡人には出來さうもありませんね。

主人　無論、南洲そのまゝの心境を、直ちに一般の人々に期待するわけには行くまい。しかし、職業が、單に財物獲得の手段でなくて、生命力の表現であり、そしてその表現は、他人の認識に刻みつけるための表現でなくて、實人生の進展のための表現である、と云ふことだけは、すべての人々に、はつきり呑みこんで貰ひたいと思ふね。理想を云へば、職業意識を超越して、たゞ爲すべき事を爲す、と云ふ誠意だけを持つて貰ひたいと思ふのだが、そこ迄行かないとしても、少くとも、はつきりと、正しい職業意識を持つて、事に當ると云ふことは、今日の時世を救ふために、極めて大切だと思ふね。

青年　それは無論大切です。しかし、さうした考になりさへすれば、それで安心して食へもし、社會の尊敬も受けられると云ふ保障がない限り、貧しい人は財物へ、豐かな人は名譽欲へと走るのは、普通人として、やむを得ないことではないでせうか。

主人　やむを得ないと云つて居れば、何時まで經つたつて、やむを得ないだらう。

青年　僕自身でも、先生の仰しやる事は、頭では解つて居ながら、何となく不安に感じますが……

主人　それは實力の問題だよ。實力がありさへすれば、そんな不安はない筈だ。

青年　實力と云ひますと？

四、職業技術の錬磨

◎主人　それは讀んで字の如くで、職業を遂行して行く力量、云ひかへると、職業技術だね。それが確かりさへして居れば、財物も名譽もひとりでに蹤いて來る、と云ふ自信が出來るから、安心して、自己の生命力の表現を樂むことが出來る。ところが、その力量が足りないと、やれ今の世の中は正直にして居ては通れないの、やれ、地位や名譽がないと思ふ通りの仕事が出來ないのと、色々勝手な理屈をつけて、不正な利得を狙つたり、虚名に走つたりしなければ成らな

くなる。それは恰度、不勉強な學生が、試驗の時に、カンニングをやるやうなものでね。

青年　人生のカンニングと云ふ譯ですか。

主人　さうだ。力量が仕事に伴はないと、とかく不安になる。不安になると氣の小さい人間は自殺するし、橫着な人間はカンニングをやる、と云ふことになるんだ。かう考へて來ると、職業技術の如何は、單に、食ふか食はぬかの問題であるばかりでなく、社會道德に重大な關係を持つことになる。

青年　なるほど。職業教育の重大視されるのは、さう云ふところにも理由があるんですね。

主人　さうだ。何と云つても、人間は一種の動物なんだから、食はなくては何とも仕方がないが、それも人に賴つて居たんでは、何時まで經つても、不安は絕えない。やはり、自分で食ふのが一番確かだ。そこで、自分で食つて行けるだけの力量なり、自信なりを持たせるのが、職業教育の一つの重大な任務になる。無論、前にも云つた通り、職業の眞意義は、各人がその生命力を表現して、人生創造に奉仕するにあるのだから、其の點は十分はつきりさせなくては成らない。しかし、それも自分で食へるだけの力量を持たせてのことだ。所謂「恒產無き者は恒心なし」でね。

青年　先刻先生は、生活費のことなんか、大して重大でないやうな風に、仰しやいましたが……

主人　重大でない、とは云はなかつたつもりだ。たゞ、それを職業の眞意義だとするのは誤りである、と云つたまでだ。その職業の眞意義を發揮するも、しないも、自分で食へるだけの自信がなくては、どうにも成らないからね。とにかく、職業上の力量を養ふことは、いづれにしても肝要だ。

青年　その點では、今日の教育制度は、隨分不完全ではないでせうか。

主人　制度も惡いが、教育を受ける方の側もよくない。あまりに學校にたより過ぎるんでね。で、君等もあまり學校をあてにしない方がいゝ。ある程度まで頭が開けたら、あとは自力で行くさ。

青年　よくさう云ふことを云はれますが、それがなか〳〵……。

主人　そりや簡單には行かんさ。しかし全國の青年の中には、その點で隨分偉いのが居るよ。

青年　さうでせうか。

主人　さうでせうかつて、君はちつともそんな青年達の話を聞いたことはないのかい。青年團あたりで、そんな青年の事績を集めた本を、毎年出して居るやうだがね。

青年　まだ、讀んだことがありません。

主人　それはいけないね。君、むづかしい本を捻くるのはいゝ加減にして、少し、あゝ云ふ實際の體驗を書いた本を讀んで見たまへ。全くせい〳〵するよ。君位の煩悶なら、きつと吹き飛ばされてしまふだらう。

青年　そのうち、是非讀みたいと思ひます。

主人　そして折があつたら、さうした青年達に、直接逢つて見たまへ。生活難とか、失業とか云ふ問題は、まるで考へて居ないやうに見えるぜ。それこそ全く、自分の生命の表現を樂しんで居るやうに思へるんだ。

青年　さう云ふ人達は、相當に教育もうけて居るんでせう。

主人　中には、中等程度位は出て居る人もあるが、大抵は補習學校程度だね。いづれにしても、學校の力は大したものではないやうだ。自主創造、これが彼等に共通な標語でね。

青年　なるほど。

主人　君も隨分自力で行く方だが、さうした青年達に比べると、まだ何處やらに、制度や他人の力を當にして居るところがあるやうだね。

青年　さう云はれると、面目ありません。

主人　人の褌で角力を取らう、と云ふ根性がぬけない限り、到底本當の力量は養へないと思ふね。宮本武藏は、「神佛を尊んで、神佛を頼まず。」と云つて居るが、その位の覺悟があつて、はじめてあれだけの力量が養へたんだ。無論、私は、教育なんかどうでもいゝ、と云ふのではない。君達のやうな青年のために、國家がもつと考へてやらなければならないのは、云ふまでもないさ。しかし、どんなに施設が完備しても、結局は本人次第だよ。さつき云つたやうな偉い青年になると、國家の施設なんかを、ぼんやり待つては居ないんだ。自分に必要なものは、自分で工夫して行くと云つたやうな風でね。

青年　實際僕等も、もつと確かりせんといけませんね。

主人　尤も、自力でやると云つても、他人や社會の力を馬鹿にすると云ふ意味ではないよ。そこは誤解しないやうにして貰ひたい。

青年　それは無論わかつて居ます。絶對の自力なんか、有らう筈がありませんから。

主人　他人の力を取り入れるのも、やはり一つの自力だからね。蜘蛛見たやうに、自分の頭から引き出した網だけをたよりにして居るのも、考へものだ。

青年　つまり、其の取り入れかた如何が大切ですね。

主人　さうだ。たゞ漫然と他人の力に依頼して居たんでは、何時まで經つても、眞に自分の力量を養ふことには成らない。それは却つて自分の力量を殺ぐやうなものだ。また、一口に職業技術と云つても、惡辣に立廻つて、他人の勞力を盜みとるやうな技術もあるし、又社會事業とか社會敎化とかを看板にして、うまく人の褌で角力を取るやうな技術もある。さう云ふのも、自力と云へば自力だが、それは泥棒や人身賣買業者と同樣、職業の意味を根柢から誤つて居るので、全く問題にはならない。

青年　さう云ふのが、先生の所謂、蟻の生活ですね。

主人　さうだ。職業技術を養ふと云ふ點から云つても、やはり蜜蜂の生活が一番いゝやうだね。自力の網に閉ぢこもつて、獨りよがりに成るのも考へものだし、それかと云つて、他人の努力の結果のみをあさり歩いて、何等自分の力を加へた創造をやらないのもいけないし、結局は、他力と自力を練りまぜる蜜蜂式の生活が、本當に自分の力を養ふことになるよ。これは、學問を職業にして居る人にも、當てはまることなんだ。怠惰で、獨斷的な理想主義者が蜘蛛、無批判で、百科全書的な經驗主義者が蟻、理想と經驗、思索と讀書とを常に織りまぜて居る人が蜜

蜂、と云ふ工合にね。

青年　なるほど、面白い譬ですね。ところで、先生、職業技術だけで、本當に安心が出來るものでせうか。世の中は、さうばかりも行かないやうに思ひますが。

主人　本當に身についた力量があれば、決して不安なことはないと思ふがね。

五、運命及社會の威力に對する態度

青年　でも、人間には運命と云ふものがあり、また、社會の何かの缺陷のために、隨分無茶な壓迫を蒙つて、立派な力量はありながら、身動きも出來ない、と云ふやうな場合も、實際にはありますからね。

主人　なるほど、それはたしかにある。

青年　むしろ人間の不幸は、運命のいたづらか、社會の缺陷かによることが多いのではありますまいか。

主人　考へやうでは、さうも思へる。だが、一體運命とは何かね。

青年　人間の力では、どうにも成らないのが運命でせう。

主人　そんな力を持つた神様でも何處かに居る、と云ふのかね。

青年　それはどうだか知りませんが、とにかく、人間業では、どうにも成らない場合があると思ひます。

主人　人間業で動けば、それは運命とは云へないね。

青年　無論です。

主人　さうすると、運命と云ふものは變なものぢやないか。

青年　變なもの、と云ひますと？

主人　つまり、人間の力では動かないものであるが、同時に動くものでもある、と云ふことにもなる。

青年　先生の仰しやることは、さつぱり解りませんね。

主人　君は、人力の及ばない範圍が運命だ、と云ふんだらう。

青年　さうです。

主人　すると、人力が及べば、運命は退却するわけだね。

青年　はあ……。

主人　解らんかね。では、君に尋ねるが、甲乙二人の漁夫が居て、甲は漁に出たために、暴風にあつて難破し、乙は何かの用で出なかつたために、難を脫れたとする。この場合、甲は運がわるくて、乙は運が善かつた、と云ふわけになるね。

青年　さうです。

主人　ところで、もし乙が、暴風のあるのを豫知して出なかつたとすると、どうなるかね。やはり運がよかつた、悪かつたで、片づけてもいゝものかね。

青年　その場合は運とは云へないでせう。

主人　なぜ。

青年　それは、人間の知力で、その難を免れることが出來るからです。

主人　つまりその場合は、運命の差でなくて、漁夫としての力量の差だね。

青年　さうです。

主人　さて、さうなると、同一の事柄が、運命と呼ばれる時もあれば、さうでない時もある、と云ふわけだね。

青年　なるほど解りました。運命と云ふものは絶對的のものではありませんね。

主人　さうだ。運命は暗のやうなものなんだ。光が屆きさへすれば、暗は無くなる。それと同樣に、人力が強くなれば、運命と云ふものも、全く無くなるかも知れない。要するに、人間の力量次第だよ。また、社會の缺陷から來る不幸にしても同じことで、力量次第では、不幸が不幸でなくなるんだ。むしろうべこべに、社會の缺陷なんか無くすることが出來ると思ふね。

青年　個人の力量はどんなに立派でも、組織が悪いと、一概にさうばかりも行かない、と思ひますが……。

主人　一應尤もだ。しかし、元來社會は個人が集つて作つたものなんだから、その組織の善悪も結局は個人の力量によつて決まることだ。だから、組織の悪いことばかり云つて居ないで、みんなが、もつと力量を養ふことだね。大體、運命悲劇とか、社會悲劇とか云つても、詮じつめると、人間の力量の不足から生じた、所謂性格悲劇なんだ。

青年　なるほど。

主人　だから、やはり力量第一主義で、ぐいぐい押して行くに限るよ。」

六、公事能力の涵養

青年　力量の大切なことはよく解りました。しかし、そこいらになると、力量と云つても、それは單なる職業技術だけではありませんね。

主人　それはさうだ。職業が生命力の表現であり、人生創造への奉仕である、と云ふ自覺を以て行はれる限り、そこには、自然にある程度の協力もあり、互助もあるのは云ふ迄もないが、何と云つても、それは異事的協力、つまり各自が別々に各自の道を進むと云ふ形式になるので、單にその方の力量があるだけでは、吾々は、十分力強く運命や社會の威力と戰ふことは出來ない。君が、職業技術だけでは不安だ、と云つたのも、其の點が心配なんだらう。

青年　さうです。

主人　そこで所謂同事的協力、卽ち、公の事に協力する力量が必要になつて來る。例へば、學校を建てたり、橋をかけたり、衞生設備をしたり、秩序を維持したり、或は法律制度や、經濟機構や、社會組織の改善を計つたりすることに、協力の能力がないとすると、各人の職業技術はどんなに立派であつても、世の中は決して善くならないし、何時、何處から、どんな不幸が不意に襲つて來るかも知れないので、吾々は常に不安の中に居なければならない。これは全く解り切つた事なんだ。ところが、職業上の力量を養ふことには努力しても、この方の力量を養

ふことには無關心で居る人が、非常に多いのは殘念だ。

青年　日本の政治腐敗の原因も、たしかにそこにあるやうですね。

主人　全くだ。日本人は、元來、職業上の力量に於ては、白人なんかに劣るものでないが、公共の事になると、まだ〳〵前途遼遠の感があるね。五倫の道德で養はれて來たためかも知れないが、直接關係のある人のためには、隨分立派な行動をするに拘らず、廣い社會と云ふものに對する道德は、から駄目だ。

青年　選擧の腐敗、議會の墮落、そしてその結果が、社會不安、農村疲弊、失業、ルンペン、暗殺、暴動、運命觀、自殺——成るほど、考へて見ますと……

主人　さう何もかも、政治にばかり責を歸するわけにも行くまいが、大半の責任はたしかに政治にあるね。

青年　鄉土生活や地方自治も、黨弊のために、この頃ではめちやめちやなやうですね。

主人　それと云ふのも、全く國民に「公」に對する眞の理解がなく、正しい意味の協力をやる力量がないからだ。もしその方の力量さへ出來れば、君が恐れて居る運命とか、社會とか云ふもの〻威力も、大半は無くなると思ふね。

青年　一般國民の自覺は無論必要でせうが、政治家の方も、少しは反省して貰ひたいと思ひますね。國民を墮落させて居るのは彼等なんですから。

主人　そりや云ふ迄もないさ。しかし他力本願では、いつまで經つたつて、善くは成らんよ。代議士なんか、商品と同じで、買手の眼さへ高くなれば、粗製品は市場から姿を消すだらう。元來、「彼等に墮落させられる。」なんて考へるのが間違ひだ。こちらが墮落さへしなければ、墮落しないで濟むんだらう。そこが人間精神の自由なところぢやないかね。

青年　さう云へば、さうですが……

主人　さう云ふより外に云ひやうがないね。運命や社會の威力を恐れる前に、先づ自己の正義觀の曇れるを恐れ、自己の意志の弱きを恥づるのが順序だらう。自分のやるべきことはやらないで置いて、天を怨み、世を咀つて、自暴自棄になつたり、破壞的行動に出たりするのは、人間として恥づべきことだ。殊に、今日の立憲政治組織の下に於ては、國民が良心的であり、正しく公事を運用する力量さへあれば、社會悲劇の大部分は征服が出來るし、また所謂運命悲劇と云ふもの〻範圍も、ずつと縮少されるだらう。

青年　よく解りました。無論僕だつて、職業だけでなく、さう云ふ方面にも、相當に努力して居

るつもりです。しかし、何しろ一人だけの力では、どうにもなりませんでね。

主人　さう云ふ考へ方が、第一、いけないんだ。みんなが、一人では駄目だ、と思つて居たら、いつまで經つたつて、駄目ぢやないか。結束して立てれば、それに越したことはないさ。しかしそれが出來なければ、一人で立つんだね。善の力が一つ殖えると、世の中は、それだけいゝ方に向いて行くにきまつて居る。しかも、「德は孤ならず必ず隣有り。」で、一人が立上ると、あとからあとからと、同志は出來るものだ。恰度、海鼠を食ふ人が一人出來ると、みんなが安心して、それを食ふやうなものでね。しかし、最初に海鼠を食つた人間は、餘程剛膽だつたらうと思ふ。

青年　なるほど。僕もこれから、その剛膽な一人になるつもりで、しつかりやつて見ませう。

主人　どうか、さうあつて欲しものだね。

七、人間愛に對する信

青年　ところで先生、職業技術や公事能力を養つて、運命の迫害や、社會の缺陷の大部分を、征服することが出來るとしましても、それは遠い將來のことで、今すぐと云ふわけには行かないと思ひますが……。

主人　それは無論さうさ。

青年　すると、現在どんなに良心的に努力しても、運命や社會組織から來る慘害を、多少とも受けないわけには行きませんね。

主人　それはやむを得ない。

青年　先生のやうに、やむを得ないと云つて、平氣で居られゝば結構ですが、僕達にはそれが出來ないのです。それで、さうした場合の心の持方ですが……

主人　つまり、君の言ふのは、さう云ふ慘害に出逢つた場合、どうしたら絶望しないで居られるか、と云ふんだらう。

青年　さうです。明かに自分の怠慢のために招いた慘害なら、又、自分の努力で取りかへさう、と云ふ氣にも成りませうが、全力をつくして、正しい生き方をして居ながら、所謂運命に飜弄されたり、社會から無法に虐げられたりしたら、再び自力で立たうと云ふ氣力を失つて、噴火口に飛び込んだり、破壞的行動に出たりするのも、やむを得ないんぢやありますまいか。それも力量の不足だと云つて、濟ましてばかりは居られないやうな氣がしますが……。

主人　尤もだ。さう云ふ人に、あく迄も自力で立てと云ふのは、一寸忍びないところもあるね。しかし、自殺したり、破壊的行動に出たりすることまでも、是認するわけには行かない。さう成るまでには、まだ道がある筈だ。

青年　それはどう云ふ道でせう。

主人　愛の力を信ずることさ。社會の組織はどんなに悪くても、一人一人の胸には、天が與へた愛の乳房が、まだ滴つて居る。少くとも、世界の何處かには、さう云ふ乳房を持つた人間が居る。それを信ずることだ。そのうちには、屹度何處からか愛の手がやつて來る。そして、それによつて、再び自分の力を蘇らすことが出來るだらう。無論、自信を失ふのは、いゝことではない。しかし、自信を失つたら、自暴になる前に、先づ愛の力を待ちのぞむべきだ。それは決して恥づべきことではない。そのためにこそ、吾々は家庭を作り、社會を作つて居るんだ。むしろ、さうした場合、世の中に顏をそむけることとこそ、人間として恥づべきだと思ふね。世の中には、逆境には打克つたが、心は冷たくなつてしまつた、と云ふやうな人がよくあるが、それは人間としての眞の勝利者ではない。それこそまさしく敗北者だ。勝つたつもりで、その實負けて居る。と云ふのは、その人の心から、「人間」が失はれて居るからなんだ。むしろ私

は、逆境にひしがれても、愛を信ずる心を失はない人の方が、人間らしくていゝと思ふね。

青年　先生の自力主義も、どうやら、少しあやしくなつて來ましたね。

主人　いや、私の自力主義に變りはない。だが、私の自力主義は、正義と愛の世界を建設したいための自力主義なんだ。愛を失つては、自力主義は意味を成さない。私が、心の冷え切つた强者よりも、愛を待ちのぞむ弱者に與するのも、そのためだ。

青年　なるほど。ところで、先生、人間の愛の力を信ずるだけで、本當に心の落ちつきが出來るものでせうか。待つても、待つても、人間の愛の手が下つて來ないと云ふ場合も、隨分あると思ひますが……。

八、神と共にある心

主人　それは、たしかに無いとは云へないね。基督が十字架にのぼつたやうな場合のことを考へて見ると、人間を相手にして居たのでは、どうにも成らないからね。

青年　さう云ふ時こそ、何か人間以上の大きなものに、すがりたくなるんではないでせうか。

主人　私は、宗教についてあまり云ふ資格を持たないが、もし神の愛、佛の愛、宇宙大生命の愛

と云ふやうなものに、自分が抱かれて居る、と確信するやうになれば、それこそ、人間としての本當の力量が出來たと云へるだらう。さうなつたら、如何なる場合にも不安は無からうし、また、決して人間としての行動を誤ることもあるまい。

青年　先生は、宇宙力のお話の時に、「神は人間の造主でなくて、却つて人間が神の造主だ。」と云はれましたが、さうすると、神の愛に抱かれると云ふのは、どう云ふ意味になりませうか。

主人　それは、簡單に云ふと、無限の理想に抱かれる、と云ふことなんだ。これは、私一個の考かも知れないが、神とか、佛とか云ふのは、人間が抱きうる最高の理想を、實在化したものだと思ふね。

青年　宇宙の大生命と云ふのも、同じなんですね。

主人　さうだ。それは物理的な宇宙力を指して云ふのでなく、吾々の無限の理想を、宇宙力に反映せしめて名づけた名なんだ。

青年　反映せしめると云ひますと？

主人　つまり、我々の理想するが如き力が、宇宙力の中に存在する、と信ずることなんだ。

青年　實際、宇宙にそんな力があるものでせうか。

主人　それがないと云つてしまへば、理想は空虚なものになる。宇宙にその力がある、と確信してこそ、吾々が理想に向つて突進する意味も出て來るんだ。しかし、さう云ふ問題は、めいめいの信仰如何にあるので、議論では決めたくないと思ふね。

青年　しかし、神や、佛や、宇宙の大生命が、人間の理想の實在化されたものであるとすると、その愛に抱かれると云ふことは、自分で作つたものに自分が抱かれる、と云ふことになつて、何だか變ではありませんか。

主人　私は、ちつとも變でないと思ふ。

青年　でも、自ら立ち上る自信を失つたものが、自分の作つた理想に抱かれて、救はれると云ふのは、矛盾して居ますね。

主人　すると君は、自信を失つたものは、自分以外のものにたよるより仕方がない、と云ふのかね。

青年　それが、當りまへではありませんか。

主人　しかし、人間は、詮じつめると、自分の力で生きて居るものなんだよ。

青年　自分の力を信じなくなつても、ですか。

主人　さうだ。自信を失つて、自分以外のものにたよるにしても、その自分以外のものゝ力を信じ、それに希望をかけるのは、結局自分の力ではないかね。

青年　それにしても、自分の力を信ずることの出來ない者が、自分の作つた理想だけを信ずるとは云ふことは、あり得ないと思ひますが。

主人　普通に頭の中だけで考へた理想だと、さうかも知れない。しかし、理想が十分に熟して、信仰の域に達し、實在化されて來ると、それは、自分のものでありながら、自分以上の力を持つやうになり、自分の力には信が置けなくとも、その力には十分希望をかけることが出來る、と云ふやうになるものだ。そこに人間精神の靈妙な働きがある。

青年　なるほど、宗教上の信仰と云ふものは、さう云ふものでせうかね。

主人　だが、これは私一個の神についての考へだ。神の內容は、恐らく、人によつて違ふだらう。ちがつてもかまはない。それは議論で決めらるべき性質のものではないのだから、めいめいに、安心の出來るやうな信じ方をするがいゝと思ふね。兎に角、無限圓滿にして愛に充ち滿ちたものゝ存在を信じ、常にそれと共に歩み、それと共に悦び、且つ艱むことが出來るものは、どんなに行き詰つたやうに見えても、決して本當に行詰ることはない。信仰の形式如何に

拘らず、それだけはたしかだ。

青年　すると、信仰の力が人間の最後の力だ、と云ふことになりませうか。

主人　さうだ。それが人間の最後にして最大の力量だ。私はさう信ずる。

青年　佛教などで、他力とか自力とか云ひますが、先生の御考へのやうですと、一體、どちらの方になりませうか。

主人　私は、「生命」や「人間性」の話をした時にも云つた通り、生命は本來自律的なもので、その成長は、要するに、自律性の發展だと考へて居るから、人生觀の範圍では、無論自力宗だ。しかし、宗教的信仰と云ふことになると、自力と云つた方がいゝか、他力と云つた方がいゝか、解らないね。

青年　それは、どう云ふわけです。

主人　神は自分の理想の實在化されたものであり、且つこれを信ずる力も自分のものである、と考へると自力だが、自分の描いた理想であつても、それがすでに自分以上の存在であり、しかも、それを信ずる力も、亦、それに惠まれたものだと信ずると、他力になる。

青年　なるほど。

主人　元來、自力とか他力とかは、まだ自分と神とを、區別して考へて居る場合に、云へることで、自分と神とが一體になつた境地では、自力も他力もないわけだ。そこまで進むと、神の力は自分の力、自分の力は神の力、と云ふわけになるから、自信を失ふとか、神の愛にすがるとか云ふやうなことは、全く問題でなくなるだらう。それこそ眞に大力量の人で、どんな苦難に逢つても、智慧と勇氣が滾々と湧いて來て、自由無礙に振舞ふことが出來るんだと思ふね。

青年　さう云ふ人が、先生の所謂宇宙我を養ひ得た人なんですね。

主人　さうだ。宇宙卽我、我卽宇宙、宇宙と我とは、さうなると、別々のものではない。

青年　すると、他力宗とか、自力宗とか、銘打つて居る間は、まだ本物ではないわけですね。

主人　一概に本物でないとは云へない。一體、宗旨と云ふものは、修行の態度を示したもので、究極の境地を示したものではない。だから、單にそれだけで、本物であるとか、さうで無いとかを、決めるわけには行かない。同じく他力宗を標榜して居ても、法然や親鸞は本物だつたらうと思はれるし、この頃の坊さん達の中には、隨分あやしいのが居るやうだからね。

青年　なるほど、宗旨を修行の態度だと考へると、必ずしも、一宗一派に捉はれる必要がありませんね。

主人　宗旨から宗旨へと、あまり浮氣に飛びまはるのも考へものだが、一つの宗旨に捉はれてはいけない。況んや排他的根性をやだ。古來の偉大な宗教家達は、いづれも吾々に眞理の明月を指して呉れて居るが、吾々は、どうかすると、その明月を見ないで、指だけを見て居る。そして指を眞理だと思ひちがひして居る。そこで宗派のいがみ合が始まるんだ。さうなると、宗教も人間を救ふのでなくて、却つて人間を地獄に蹴落すことになるね。吾々の生活態度に不動の基礎を與へるための信仰は、決して、そんなものであつては成らないのだ。

青年　僕達としては、どう云ふ筋道をとつて、宗教に這入つたらいゝものでせうか。

主人　さうだね。佛教なり、基督教なりに、すでに何かの信仰を持つて居れば、その方を深めて行く方がいゝだらうと思ふが、もし、さうでなければ、先づ、偉大な宗教家達の傳記や、言行錄などに親しんで見ることだね。そのうちには、自然と、君自身の方向がきまつて來るだらう。

青年　有りがたうございました。今夜は隨分晩くなりましたが、序に、もう一つお尋ねしたいことがあるんですが……

九、懺悔奉仕の心

主人　やはり宗教に關したことかね。

青年　宗教に深い關係があることと思ひます。それは懺悔奉仕とか、懺悔の生活とか云ふことの意味なんです。

主人　うむ。實は、私もそれについては、一寸でも話して置きたい、と思つて居たところだ。前に云つた通り、吾々の生活態度をきめる根本の觀念は、生命力の表現による人生創造にあるんだが、それは職業奉仕と公事奉仕とによつて、大體成し遂げられる。そして、眞にそれに磨きをかけるものが、懺悔奉仕なんだ。懺悔奉仕と云つても、實際にやる事柄が、職業奉仕や公事奉仕と、根本的にちがつて居ると云ふわけのものではない。それは罪の自覺と、それに伴ふ懺悔の心をもつて、すべての事に當らうと云ふ、心の態度なんだ。

青年　罪の自覺と申しますと？

主人　罪と云ふと恐ろしく聞えるかも知れんが、つまり、自己の不完全を十分に意識して、許されて生きる、と云ふ心持になり、その心持を持ち續けて、社會人生に對しようと云ふのだ。

青年　なるほど。さうすると、權利とか義務とか云ふ觀念からは、無論離れて居るわけですね。

主人　凡そ、さうした觀念とは、最も緣の遠い生活態度だらう。

青年　さうした態度の人には、正義なんて云ふ觀念もないんぢやないでせうか。

主人　普通の人が考へるやうな風には、考へて居ないかも知れない。しかし、それが無いとは云へないと思ふ。却つて、普通人よりは深いものがあるんではないかね。

青年　深いと云ひますと？

主人　吾々は、普通、愛と正義と云ふ風に、感情的方面と理性的方面とを分けて考へて居るが、懺悔奉仕の生活態度をとりうる人にとつては、恐らく、それは別々のものでは無いだらう。更に進んで云ふと、自分が人を愛し得ると云ふやうな考は、非常に傲慢な考で、自分は常に惠まれてばかり居る、と考へて居るんではないかね。そして、さう云ふ心を持つことこそ、その人達にとつては、宇宙の心、——もし正義と云ふ言葉を使へば、正義——に叶ふものだと思つて居るだらう。

青年　恐ろしく他力宗のやうに思はれますね。

主人　私に云はせると、非常に自力的だと思ふね。少しの貪るところもなく、普通に考へて當然

自分のものであるものをも、惠まれたものだと考へるやうな心境は、なまやさしい努力で、達せられるものではないよ。

青年　なるほど。しかし人生に對する態度は、隨分消極的ではありませんか。人の家の便所の掃除ばかりして、殘飯を食つて生きて居るやうな生活は、どうも感心出來ませんね。

主人　たしかに、その嫌はあるやうだ。しかし、修行の道程として、あゝした下座行をやるのも、必要だと思ふね。

青年　修行としてならいゝでせうが、中には、それが生活の全部であり、それ以外に高貴な生活はない、と考へて居る者もあるやうです。

主人　さうなると、たしかに邪道だ。

青年　一體、「許されて生きる」なんて云ふ考は、必然的に、そんな結果になるものではないでせうか。

主人　さうは考へられない。眞にその考を生かして行けば、非常に積極的な生活態度になるだらうと思ふね。

青年　それが、僕にはどうも解りません。

主人　人間は不完全である。不完全であるから絶えず罪を犯す。そして、その罪は永遠に消えない。それは大海に落とした朱の一滴のやうに、明らかには見えないが、何處かに漂うて居る。十滴、百滴、萬滴、億萬滴とたらして行くうちに、海はだん〳〵と朱に染まるであらう。吾々の社會も、かうして常に濁つて行く。しかし、不完全なる吾々にも、一つの尊いものが與へられて居る。それは理想を追求し、神を求むる心である。吾々は罪を消すことは出來ないが、この神を求め、理想を追求する心によつて、よきものを生み出し、それを世に捧げて、罪の償ひをすることが出來る。善の力を惡の力に打勝たせ、それによつて、社會の汚濁を洗ひ落すことが出來る。そのために吾々は、政治、教育、藝術、經濟、その他生活のあらゆる部門に於て、自己の持場を、極限まで生かして行かなければならない。吾々は、常に、許されて生きる心を堅持しなければならない。しかも、吾々はその成果に誇つてはならない。吾々は、常に罪を犯すであらうから。——と、かう考へたら、積極的にならざるを得ないではないかね。

青年　なるほど。すると懺悔奉仕と云ふのは、職業奉仕や、公事奉仕をやる場合の、心の持ち方であつて、別に、便所掃除と云つたやうな、特殊な奉仕の方面がある、と云ふわけではありま

せんね。

主人　無論さうさ。つまり懺悔奉仕の心は、職業奉仕や公事奉仕に、うるほひと力とを與へるものだ。しかし、さう云ふ心になるのにも、相當の修行がいる。君がしきりに氣にして居る便所掃除なんかも、その意味から云ふと、非常に深い意味があるんだ。君も、一つ、仕事の合間合間に、やつて見てはどうかね。いゝ修養になるぜ。不平や不滿を抑へるには、實に妙藥だと思ふね。

青年　なるほど。是非一つやつて見ませう。

主人　懺悔奉仕について、もう一つ云つて置きたい事は、この心が深まつて來ると、必ず強い宗教的色彩を帶びて來ると云ふことだ。云ふまでもなく、偉大な宗教家達は、皆この心に徹した人達なんだ。彼等は何者をも怨まない。怨まないばかりか、人類の僕となつて、世界中の重荷を負うて歩いたんだ。そして、かう云ふ人達によつて、世界は時々大飛躍をやる。普通の職業奉仕や公事奉仕が、眞面目に行はれて居れば、大體世界は順調に進んで行く筈のものだが、ともすると、生命の淨がたまつて、折々暗い時代が世界を襲つて來る。その時に、世界を搖り動かして、大飛躍をなさしめる者は、いつも懺悔奉仕の心に徹した人達だ。これは個人の場合でも同じで、人間の魂は、懺悔の心なしに、滅多に飛躍するものではない。親鸞が、「善人なほもて往生す、いかに況んや惡人をや。」と云つたのもこゝの事で、こゝに惡人と云ふのは、罪を自覺して、懺悔の心を抱いて居る人を指すんだ。

青年　だん〳〵承つて居ますと、無限の理想を逐ふ心と、懺悔奉仕に徹する心とは、結局同じことのやうに思へますが、如何でせうか。

主人　いゝところに氣がついた。全く君の云ふ通りだ。その事をルーテルは「信仰とは、悔い改めの連續なり。」と云つて居る。君もそこまで解れば、もうあとは實際の修行一つだ。精々事上錬磨で行くことだね。

一〇、事上錬磨と事上表現

青年　その修行がなかなかです。何しろ、毎日仕事にばかり逐はれて居ますので。

主人　おい〳〵、それでは君は、まだ何も解つて居ないぢやないか。

青年　はあ……。

主人　はあぢやないよ。事上錬磨と云ふのは、毎日の仕事の中で、事々物々に因緣を生かして行

くことなんぢやないか。そりや、坐禪をしたり、禮拜をしたりするのも、修行には相違ない。出來れば、そんなこともやるに越したことはないさ。しかし、本當に身につく修行、しかも、生活と修養とを切り離さない修行は、君自身の實生活の中にあるんだ。

青年 なるほど、さうでした。そのことは、よく解つたつもりで居ましたが。

主人 やはり、話だけでは實にならないと見えて、尻ぽを出すね。かうなると、益々以て、事上錬磨の必要がある。

青年 これから、屹度しつかりやります。

主人 君は事上錬磨と云ふことを、特別な修養だ、とばかり考へて居るから、うつかり先刻のやうな事を云ひ出すやうになる。事上錬磨は事上表現、云ひかへると、それが實生活なんだ。職業や公事に、正しく自己の生命力を表現しようと努めるのが、とりも直さず事上錬磨であり、そしてそれこそ本當の實生活であり、それ以外には、正しい意味での人間の生活はない筈だ。念々生活、念々修道、これが本當の意味での事上錬磨なんだ。解つたかね。

青年 今度こそは、本當に解りました。そのつもりで、大いにこれから奮闘します。

主人 ところで、もう何時かね。

青年 もうすぐ十二時です。

主人 今夜は隨分晩くまで話したなあ。では、この位にして寢ようかね。

青年 すると、明晩はどんなお話が伺へませうか。

主人 さう〳〵、實は私は明日から暫く旅行をする豫定なんだがね。

青年 さうでせうか。まだ國家とか、社會とか、色々さう云ふ問題について、承りたい事があるんですが……。

主人 それは、今度歸つてから、ゆつくり話すことにしよう。人生に關する基礎的な話も、不完全ながら、今夜で一先づ、まとまりがついたやうだし、當分休むことにしようぢやないか。

青年 では、又そのうちお願ひいたします。今夜は晩くまで、大變お邪魔しました。では、おやすみ下さい。

主人 當分逢へないと思ふが、しつかりやり給へ。

青年 有りがたうございます。御蔭で、以前よりはずつと氣分も落ちついたやうですから、精々働きます。先生も、御旅行中、御氣をおつけ下さい。

主人 ありがたう。ではおやすみ。

青年　左様なら。おやすみ下さい。

〔摘　要〕

一、生存、所有、表現、これが人間の生活態度を決する三つの要因である。而して、單に生存せんがために所有し表現する生活は、未だ動物的生活の範圍を出でざる生活である。又所有せんがために生存し表現する生活は、目的と手段とを轉倒せる生活で、それは正しき生活ではない。眞に正しき生活は、自己の生命力の表現を目標とし、そのためにのみ生存し、且つ所有するのでなくては成らぬ。

二、財物は、生命力表現に役立つ限りに於て、價値を有する。人は常に物の主と成つて、これを生かさなければならない。決して物に驅使せられては成らない。

三、職業は單に生活費を獲得するための手段ではない。それは生存の手段であると共に、生命力表現の手段である。職業を通じて、各人がその生命力を表現し、相互に奉仕するところに、人類文化の進歩がある。

四、各自の生存を安固ならしめるためにも、生命力を完全に表現するためにも、職業技術は十分に錬磨されなければならぬ。職業技術の優秀は、人間をして強者たらしめる。運命及社會の威力は屢々人間を劫かすが、職業技術の優秀は、ある程度まで、これに打克つことが出來るであらう。

五、職業技術を錬磨すると共に、公共の事に協力する能力が十分に養はれなければならぬ。立憲治下に於ては、この能力が十分であれば、社會の不正義は、概ねこれを除去することが出來、又ある程度まで、

所謂運命と稱するものゝ威力をも、縮少することが出來るであらう。

六、人間相互の愛に對する信は、絶對に失つては成らない。かりに全く自信を失ひ、自ら立つ能はざる場合に陷つても、尚吾々は、人間相互の愛に希望をつなぐべきである。それは決して敗北を意味しない。自力を以て困難に打克つことが出來ても、人生に顏を背ける者こそ、却つて敗者である。それは、その人の胸から、人間が失はれて居るからである。

七、宇宙の大生命と一體になり、これと共に喜び、且つ艱む心こそ、大力量の源である。かくの如き宗教的信仰は、もはや自力他力の區別を超越して居る。宇宙即我、我即宇宙、宇宙の力は我の力であり、我の力は宇宙の力である。玆に一切の不安は消滅する。

八、懺悔奉仕の心は、職業奉仕と公事奉仕とに光と力を與へ、眞にこれを完成するものである。それは決して消極的なる生活態度ではない。それは、深く自己の不完全と罪とを自覺し、大勇猛心を起して理想を追求する態度なるが故に、生活のあらゆる部門に於て、自己の持場を極限まで生かすものである。社會も個人も、この心によつて屢々大なる飛躍をなすことが出來る。

九、事上錬磨は、事上に自己の生命力を表現することである。眞の修養は實生活の中にあり、眞の生活は念々修道の心を以てするところに營まれる。修養と生活とは決して別々のものではない。

10.1.14. 1マ noma

昭和八年九月六日印刷
昭和八年九月十日發行

人生を語る
定價金一圓

著者　下村虎六郎

發行兼印刷者　東京市神田區小川町三ノ二四
合資會社泰文館代表者
伊藤巳之助

印刷所　東京市神田區表神保町一〇
泰文館印刷所

發行所　東京市神田區小川町三ノ二四
合資會社　泰文館
電話神田(25)四四九六番
振替東京六七六〇三番

6

泰文館發行圖書目錄抜萃

（圖書目錄御申越次第進呈）

江坂佐太郎氏著

新興の農村

日本デンマークを語る

四六版クロース
上製函入美本
定價金一圓五十錢
送料十二錢

最近農村振興の聲が喧しく唱へらるるに及び進むだ農村として世に紹介せらるるもの極めて多しと雖、之等は何れも一部の人に依り、一部の事業に依りて其の名聲を發揚せしものにして、農村の總てが一糸亂れざる歩調に依り、所謂統制ある進むだ農村としては誰しも先づ愛知縣の碧海郡を其の第一となすであらう。これが爲め碧海郡のことを誰言ふとなく日本の丁抹と言ふ樣になり、之れを視察し、調査せむが爲め毎年約二萬人以上の人が碧海郡を訪れると云ふことである。

今や碧海郡は高松宮殿下を初め貴顯紳士の御視察をも辱ふし、苟も農村振興を論ずるものは、碧海郡を知らずして之れを論ずるの價格なしとさへ極言し得るものである。本書は碧海郡の實情を忌憚なく觀察したる名著にして碧海郡を知らむとする人に取り絶好の良書と敢て推奬するものである。

山崎延吉先生著

最新刊

若き人々へ

四六版クロース
上製函入美本
定價金一圓五十錢
送料十錢

本書は農村の巨人、山崎先生が本年還暦の壽を迎えらるゝに當り、六十年の人生と、社會の實戰場に非凡の活動を續けて、其の長い思索と體驗から、迸る火のごとき熱情と、信念を、敢然と若き人々に訴えて、その行くべき道を明示せる、比類なき好著。嗚呼、人生の行路者よ、生活戰線の大衆よ、喘ぎ苦しむ生存の途上に、滋味豐かな生命の岩清水を欲し、又はこれならと云ふ全幅の信頼をかけ得る所の太陽を欲しないか。今や農村問題、思想問題の混沌たる折柄、斷然本書は青年喝仰の太陽となり、人々に勇氣と光明を與え、堂々と大道を濶歩せしめるであらう。非常時の日本疲弊の農村に直面してまづ何人にも本書の熟讀を勵める所以である。

農業經濟研究所編

農村負債整理組合法問答

◇農村負債整理の虎の巻◇

四六版クロース
上製函入美本
實價金一圓五十錢
送料十四錢

六百五十萬戸四千萬農山漁村民の癌と言はれて居る六十億圓の農村負債整理に就ては官民共に日夜待望の的となつて居つたのであるが、去る第六十四議會に於て滿場一致を以て貴衆兩院を通過した「農村負債整理組合法」によつて始めて前途に光明を認め得ることゝなつた。而して之が効果の如何は今後に於ける此の法律運用の適否によつて決定せられるのである。之がためには此の法律の成り立ちから其の内容を十分に理解することが必要である。此の意味に於て農業經濟研究所では、第六十四議會に於ける貴衆兩院の委員會に於て政府と委員との間に行はれた質疑應答の要點を抄錄し一般の參考に供することになつたものが即ち本書である。故に全日本に於ける農民經濟更生運動に直接或は間接に關係せらるゝ各位は何人と雖も一人殘らず一讀しなければならぬ、又負債整理事業のためには是非共座右を離す事の出來ない虎の巻である。

竹原貞治氏著

農業の認識と更生の道

四六版上製函入
定價金八十五錢
送料八錢

稼ぐに追付く貧乏神に付纏はれて連年草臥儲を繰り返し、百千の救農政策悉く無効に終れる、帝國農家の經濟は、正に大驚異である。農業經濟難の反響は、相互扶助共存同榮たるべき帝國をして、遂に階級鬪爭の巷と化し、全國家を借金地獄に陷入れ、國民は相互蠶食して共存同死する外なき狀態にある。借金整理を、更に大借金を以て上塗せんとする方策は果して誠道か、眞理に撞着せる手段は其應報や押して知るべきである、萬有循環、エネルギー不滅、相對性原理を何と見る、人生は金物理を全心理に融合統一せしめてこそ、靈長動物の眞價が存する。自力更生の目標は、金か物か將た心か、農は天下の大本、農民は人間動物の命の母である。

本書は帝國社會相を深憂するの餘、著者獨創の「家著なければ文化なし」の信條に基き、既に瀕死期に際會せる農業生活に安心立命を授け、農村自力更生の術は直ちに移して、帝國保全要道たる所以を說破し、各社會階級を猛省奮走せしむる一大敎訓である。敢て先覺諸人士の熟讀を奬む。

中原菊次郎氏著

農村の更生を語る

四六版クロース上製函入美本
定價金一圓
送料八錢

著者は南國の農村に生れ、教職、或は在鄉軍人分會長、村長、縣會議員、耕地整理組合長其外地方の公職に就き恒に農村の更生を實際的に研究せる先覺者である。本書は著者が現今農村疲弊の慘狀を座視するに忍びず敢然茲に五十餘年間體驗せる蘊蓄を傾け公職の側寸暇を以て筆を執つたもので農村愛の熱情言外に溢れ憂國の言々句々吾人を首肯せしむるものがある。

先づ世相を慨し農村疲弊の原因を簡明して農村更生の方法を述べ更に理想農村の建設に及んだもので實に農村の前運に照明を與へたる名著である。

現下農村問題に關心を有する士や農村更生を按する人々に一讀を望むのである。

大杉房吉氏著

農村問題の再吟味 農村の生くべき道

四六版上製函入
定價金一圓二十錢
送料十錢

農村はどこにゆく？地主は、小作人は、自作農はどうなる、開闢以來の疲弊困憊のドン底につき落された農村の眞實は白日下に暴露された、今後の問題は、的確なる打診によつて難局打開不況克服の良藥を盛り、強く明るく・住みよい・希望ある・輝く農村を再建設すべく徹底的に匡救し更生の方途を打ち建てることにある、然り農村はどうしたら蘇生・復活・甦生するか、著者は現實に即して農村問題の諸樣相を再吟味、再檢討し「かうすれは必ず農村は繁榮する」と云ふ鐵案を確信を以て具體的に詳說し、殊に消極的匡救から積極的振興への生くべき道程を明かにせんと努めた、農民農家は素より、農村の指導者・技術員・教育家・公務員・有志家等農村問題解決に熱誠なる人士の緊急必讀の良書として斷然之を推薦する。

岩谷愛石氏著

自力更生によつて救はれた村々

好評五版

四六版上製函入
定價金一圓八十錢
送料十二錢

六十億の借金と、負債の過重と米繭其他の暴落のため、恰も馬糞紙のやうに蹈み躙じられたる農村は、遂に忍從の苦難に堪へられずして、S・O・Sの悲鳴をあげた、今日の如き農村疲弊は絶對にない。搾取と欺瞞は資本主義制度の生命である農民よ立ち上れ。農村を救ふものは農民自身の他に無いのだ　自力更生！

◇本書は我國農村の疲弊困憊の其中に村民全部が一致して、自己の鄉土を開發したる活きたる涙物語り、共同組合、產業組合、農會、學校、村役場青年團等が、如何に眞劍に努力し活動したか。盲目村長森恒太郎氏の血と涙の苦鬪談、共產主義者と誤解せられて理想の鄉土を建設したもの、五人組制度で三十萬圓、十人一區の共產制度、昭和の二宮尊德、全村禁酒、借金組合等々其一つ一つが農村指導のシステムである。讀め！農村指導の先覺者。本書一册あればどんな疲弊の町村でも直に生れ更つて樂園となる。

相原言三郎氏著

自力に依る 農村更生の道

好評五版

四六版上製函入
價價金一圓二十錢
送料八錢

著者は。日本最初の勤勞中心主義による、自給自足の農學校である香川縣立農事講習所長として修養即生產の物心一如の教育に從事してゐる農業新教育の創始者である。學園及農場費の一切は勿論職員の俸給より一本のチョーク一枚の紙に到る迄、縣費より一文の補助もなく全く農場經營の純益によつて文字通りの自給自足の農學校である。本書は著者が現時農村の慘狀を默視するに忍びず、玆に敢然筆を執る、實に言々句々農村愛の至情に燃えた愛國の叫びである。而も懇切に農民及農村の辿るべき道及方法を。著者が身命を賭しての眞劍な三年有半の血みどろの體驗記である。自己の體驗より教へた名著である。山崎延吉先生は慇々書を寄せて『君の惡戰苦鬪には深甚な敬意と同情とを捧げる』と激勵された。尙講習所の設立者である橫尾惣三郎氏は『骨を削り肉を殺いだ尊き經驗の結晶である』と激賞されて居る。

東京農業大學教授農學博士　石坂橘樹先生著

農村庶民金融

農業金融問題は農業經營改善上に於ける中樞的必須の大問題にして、現下の深刻なる農村疲弊不況を打開せんと欲せば心すや先づ農業金融に於て宜しきを制せざるべからず、本書は農業經濟學者として有名なる著者が農業金融の全般に亘り理論・政策・現狀・機關改善方策に就き詳論せられたるものにして、農業經營者は勿論、農業上の技術員・教育者・行政家・學生等の必讀すべき緊要書なり敢て一讀を慮む。

要目　まへがき—第一章　農業信用の性質—第二章　農業信用の種類—第三章　農業信用の用途◇土地改良信用◇經營信用—第四章　農業信用の機關◎農業不動產信用機關◇株式組織の土地銀行八項◇組合組織公設土地信用機關四項◎農業動產信用四項◎農業對人信用十二項—第五章　農業信用の運用—第六章　農業信用の資源—第七章　結論（日本農業の金融的逼迫の由來・性質・趨勢）

菊判上製箱入　定價金一圓　送料十錢

薬師寺健良先生著

農村社會學

農村社會に繼起する諸種の社會問題及び社會現象は社會自體が釀し出す社會の姿なのである。だからそれらの問題を解決するとか農村を振興するとかの問題は、農村社會自體の姿と、その中に流るゝ根本の原則とを正視し探求しその因と進行形とを悟らねば判らない。それらの導きをなすのが社會學である。併し社會學は從來多く社會學者のみの領域に長く放置され唯、理論的な架空の學問であるかくの如く考へられ一般民衆との接觸を缺いでゐた、けれど社會學は社會學者の專有物や玩弄物ではない。社會人そのものの學問である、故に吾人は之を學者の手より社會大衆の手に引戻さんがために即ち先づその中繼放送をなさんがために本書を農村に送りたいと思ふ。

四六版上製箱入美本　定價金二圓五十錢　送料十四錢

神戸昌平氏著　▼趣味と實益との横溢▲

農業界の現象　耕種篇

菊判上製函入美本　定價金二圓　送料十二錢

一、現今農業に關する著書も亦いはゆる汗牛充棟裔ならざるの狀態であるが、農業界の現象を平易簡明に說述せるものは殆んど皆無といつても過言でない。然るに本書は趣味と實益とを兼ね備ふるが如く、多年實際に親しめるの經驗と諸學者の新研究とを發表してこの缺を補ひたるものである。

二、本書の內容は汎く農業に從事せらるゝ士の參考と農業知識の增進とに資すべきものが少なくないが、殊に農業教育の實際に當らるゝ教師の資料に恰適すると共に、一般農業研究者の庫右に缺くへからざる良書である。

三、本書は主として耕種界に屬する作物の改良種苗の育成管理收獲の實際より食糧問題などに至るまで、廣く各般の事項に基いて縱橫に說述せるものであるが、引續いて土壤肥料篇、畜產篇を刊行して之が完結を告ぐるのである。

岩谷愛石氏著

現代青年成功の近道

四六版クロース上製箱入美本　定價金一圓三十錢　送料十錢

ジエームス曰く『成功は一切の幸福を產み失敗は一切の不幸を產む』と何人か成功を喜び失敗を悲しまざるものあらんや。吾も人なり、彼も人なり、人間到る處に青山あり、青年諸君は奮起一番成功の榮冠を得られよ。本書は三十年間全日本青年諸君の爲に最も忠實なる道案內者たりし、赤穗大學創設者、愛國青年社長岩谷愛石先生の血と淚で書き綴られたる青年成功の近道。處世の羅針盤である。農村青年成功の近道。海外發展成功の近道。都會青年成功の近道、上京青年成功の近道。悉く本書に依つて成功が得られる。

古瀬傳藏氏著　好評五版

農民の政治
教育資料

百姓だつて人間だ

四六判クロース
上製箱入美本
定價金一圓五十錢
送料十錢

人間であつて人間扱にされない農民として、言ひ度い事も言へず、書き度い事も書けずに居る心の中はどんなに辛いことであらう。心の悶へ、惱み、それは飢えよりも寒さよりも病よりも尙辛いものである。若しそうした悶へ惱みを抱へて居るものありとすれば、其の悶へ惱みは他日、闘爭、破壞、改造、革命と云ふ樣な形容詞を用ひて言ひ表はさなければならぬやうなことになる。今や日本の農民は丁度こうした境遇にある。

茲に於てか、農業の技術指導、農業數育、農事誠驗、農業行政等あらゆる方面の體驗を持ち、農民の實生活に精通した著者が、最も輕妙な寸錢以て人の肺肺を刺すやうな著者一流の大膽なる筆を走らせ、農民の言はんとする事、書きたい事の心の悶へ、心の惱みを血と涙でねりあげて、人間のあらゆる社會に向つて投じた爆彈的快著は即ち本書である。

石田傳吉氏著　好評十八版

理想の村

四六版クロース
上製箱入美本
定價金二圓五十錢
送料十四錢

現代に於ける地主と小作の醜陋なる心理を發きて兩々興せず、その蒙を啓き倫理的に經濟的に科學的基礎に立脚し始めて階級意議を脫せし人間生活の殿堂理想の村を展開し來る。そこに爲政者も資本主も小作人も無い赤裸々の人間を見る事が出來る。堂々九百頁に餘る長編大創作である。

永井柳太郎氏曰く『その一頁々々が著者の確實なる知識と深刻なる同情とを想像せしむ……』

高島米峰氏曰く『言々句々農村の將來に同情ある傳道者の確信の表現である』

內ケ崎作三郎氏曰く『之を讀めば地獄に沈みたる貧村が天國の如き狀態に變する有樣愉快何とも名狀しがたし』

上塚司氏著　好評五版

理想的農業國

デンマーク土產

四六版クロース
上製函入美本
定價金一圓
送料八錢

北歐の一小國丁抹は理想的農業國として世界に謳歌されて居る。從つて人も吾も其國の內容を知らうとして居るが、從來丁抹を紹介した著書は或は繁に失し、或は簡に過ぎて要點を知るに不便であつた。然るに本書の著者上塚氏は衆議院議員として萬國議員會議に列席のため丁抹に渡り、親しく此の理想國を視察し何人にも容易に理解し得らるゝやうに、所謂丁抹みやげとして我が農村に提供して吳れたものである。著者は農林大臣秘書官とし、或は商工大臣秘書官とし、或は大藤大臣秘書官とし或は大藏參與官として國家の重要產業政策に關與しつゝある前途ある少壯代議士である。以て本書の價値の一般を知る事が出來やう。丁抹を知らんとするの士は速かに本書を座右に備へなければならぬ。

山形縣農林主事　鈴木富治氏著　好評五版

農村の副業

四六判クロース
上製函入美本
定價金二圓三十錢
送料十二錢

農村が日に疲弊して行くと言ふ、如何なる理由に基くか、農村を構成する農家經濟が極限まで行詰つてゐるからだ、舊時代の單式な農業經營の中に眠つて複式による農業經營に無關心だからだ、農家に於ける余剩勞力の合理的分配と現金化の二つによつて現下の勞れた農村を救濟する外に途がない、されば周期的に生ずる勞力の分配は副業に注ぐことによつて最も完全に消化される。一村或は一家の副業の振興はよくその村を生かしその家を富ます、然らば如何なる所に如何なる副業が適するか……と云ふことを示のたものは即ち本書である。殊に著者は副業の理論並に實際兩方面の指導研究に沒頭すること茲に多年、その說く所懇切詳細、その記述する所平易豐富、將に本書は副業に關する書中全くそ類を異にし鷄群の一鶴を思はしむる最近の絕好書で農家繁榮の素地を招來する唯一のパイロットである。

岩谷愛石氏著

吾等は何を爲すべきか

人生は戰の世界である。惡戰苦鬪は、吾等が生るるや、既に天より與へられたる試練である。吾等は此天の試練に堪へ忍び之に打ち克ち鬪つて行く、そこに人生の價値があり、人生の意義があると思ひます。そこに人生指導者としての著者は全國青年指導者として既に二十年間、凡ゆる苦鬪を體驗し、凡ゆる困難と戰つて來た。その汗の記錄、血と涙の體驗苦鬪談、一言一句悉く吾等處世の活教訓ならざるはない。殊に『一日一善』『一事貫行』『時間の活用』『貧乏退治』は、現代社會の思想動搖、生活不安の今日に於て如何に大なる光明と希望と幸福とを與へらるかを思ふとき、滿天下五百萬の青年男女諸君あらうか。『日曜百姓梅原青二君の努力の生活』『模範青年河本喜久一君の親子の涙物語』吾等は、本書一册に依つて如何に大なる感激と、敎訓と光明と歡喜と希望とを與へらるるやを申すに及ばず、世の青年指導者敎育者は素より、凡ゆる階級の人々にゼヒ本書の一讀を勸めたいと思ひます。

四六判リンネット上製箱入美本
定價金一圓五十錢
送料十錢

岩谷愛石氏著

好評五版

人生問題の解決

吾等は何の爲に生きて居るか

著者は二十年間全國青年處女の指導者として、實踐躬行、汎ゆる艱難辛苦を體驗し、人生の苦鬪を切り抜けて來た、其惡戰苦鬪の汗の結晶、涙の記錄を人生問題解決の一書の中に收めて、『人はパンのみにて生くるものにあらず』と幾多聖哲の人生觀を說き、或はマルクスの唯物主義を說き、ミルやベンダンの功利主義を說き、サンシモンやコントの實證主義を說き、カントの人格主義、ベルグソンの生命主義、オイツケンの神秘主義等を網羅し、明確、且つ徹底的に說破してある。思想界混亂の今日、靈魂の不滅と、信仰の確立、人生究極の目的等を最も迷ふる現代國民、殊に青年處女の前途に一大光明を與へるものは本書の他に無いと信ずるのである。

敢て全國青年處女會員、學生、敎育者、其他汎ゆる階級の人々に一讀をすすめます。

四六版クロース上製箱入美本
定價金一圓三十錢
送料八錢

帝國美術院會員 荒木十畝畫伯口繪
朝鮮總督 陸軍大將 宇垣一成閣下題字
明治神宮 農林研究會長 戶田景明先生著

萬戶必備の大寶典

家相眞法

運命開拓の一大福音書

菊版上製函入美本
口繪挿畫約百個
定價金二圓
送料十四錢

前編に於て地相、中編に於て家相、更に後篇に於て六十個の挿圖を以て簡易平明に家相法の全般を解き、附錄（漫談）に於ては、最近の中等家事敎科書及各種雜誌に揭げられたる、文化住宅圖等を採錄して忌憚なく吉凶反應の說明を加へ、尙ほ神社佛閣、學校會社工場及びビルデイング、旅館、寄宿舍借家、乃至市街地の家相農村の家相等廣汎に亙り實例をも擧げて批判を加へたもので、何人と雖も一讀して一般家相上の確固たる知識を獲得することが出來る。素人は本書により始めて眞の家相法を知り、玄人の爲には唯一無二の參考書であり指南書である敢て江湖に薦奬す。

中島靜夫氏著

一家に一冊必備の書

自力更生

自家用食料品の製法

四六版假製
定價金二十錢
送料四錢

輓近內外經濟界の異狀なる不況は、遂に平和な農村をして、疲弊困憊の極に達せしめた。今にして更生の策を樹立せざれば、朝野を擧げて經濟更生運動の絕叫せらるるに至れり。而してこれが更生を圖るの途は多岐多端に亙ると雖も、要は農民の自力更生により經濟生活の安定に依らざる可らず。

本書は農民生活に直面せる、食料品製法の實際を親切丁寧に述べ、非常時に對する家事經濟の更生を計るは固より他面に於ては農產製造により、農業經濟の刷新を遂げしめんと慾するものなり。殊に本書により、農民經濟生活の更生に資せんがために編纂したるものなれば、安價にして適切なる良書たる事は、敢て大方に推薦するに足る。

八段 木村義雄氏著

將棋新定跡

駒の歩みから初段まで

四六判クロース
上製函入美本
定價金一圓五十錢
送料十二錢

將棋はどれ程數さしても定跡を學ばなければ上達するものではない。本書は棋界の先輩故村越爲吉先生の遺稿を八段木村先生が改訂增補されたもので最も新しい定跡の指導書である。尙定跡の各章毎に木村先生の實戰解剖、村越先生の手合に對する木村先生の說明があり、又村越先生の對局に現名人關根金次郎先生及八段花田長太郎先生の手合棋譜が揭載されてあり全く他書で見られない特徵があり、斷然類書中の白眉である。村越先生の初心者に對する教導の方法及平素の意見に就ては名人關根先生も激賞されて居る。本書に依つて學べば如何なる初心者でも又相當進んだ棋力の方でも上達容易で入段の棋品となる事が出來る世の愛棋家に是非共御一讀あらん事を御すゝめする。

東京圍碁研究會編

圍碁獨習

手ほどきから初段まで

四六判クロース
上製函入美本
定價金一圓五十錢
送料十二錢

圍碁上達の方法は、先づ定石を覺へ、これを自由に應用出來る樣に研究する事である。本筋の研究をせず定石を識らず我流では何程打つても上達せぬ。本書は圍碁の起源、作法、用語等の手ほどきより、定石、布石、攻防の手段、實戰の極意を詳解し、特に本書の特長とする所は、數百の解說圖を加へ徹頭徹尾獨習者本意に手を執つて敎へる如く親切に講述した點である。

初步より入段の棋品となるまで、これ程判りよく系統的に解說した棋書は他にあるまい。本書によれば如何なる初步の人も容易に碁道の極意を會得し入段の棋品となるであらう。始めて碁を習ふ人は勿論何程打つても上達しない人、碁の書を見ても覺へられない、といふ人々に此の一卷をお薦めする。

山崎 延吉氏著	若き人々へ	價一、五〇	〒一〇
山崎 延吉氏著	世に立つ道	價一、五〇	〒一〇
山崎 延吉氏著	村民訓	價一、五〇	〒一〇
山崎 延吉氏著	農道說語	價一、五〇	〒一〇
山崎 延吉氏著	齊家の栞	價五、五〇	〒一〇
山崎 延吉氏著	農村の新教育 全村學校	價二、五〇	〒一四
山崎 延吉氏著	農村計劃	價二、〇〇	〒一三
岩谷 愛石氏著	現代青年 成功の近道	價一、三〇	〒一〇
岩谷 愛石氏著	自力更生に依つて救はれた村々	價一、八〇	〒一三
岩谷 愛石氏著	吾等は何を爲すべきか	價一、五〇	〒一〇
岩谷 愛石氏著	吾等は何の爲に生きて居るか	價一、三〇	〒一〇
岩谷 愛石氏著	農村青年の行くべき道	價 九〇	〒八
藥師寺健良氏著	農村社會學	價二、五〇	〒一四
谷本龜次郎氏著	理想農村の建設	價二、五〇	〒一四
石田 傳吉氏著	理想の村	價二、五〇	〒一四
神戸 昌平氏著	農業界の現象	價二、〇〇	〒一四
松本 寬氏著	優良農村の經營	價一、五〇	〒一三
石坂 橘樹氏著	農村庶民金融	價一、〇〇	〒八
小林 水楊氏著	農村文化と教育	價一、〇〇	〒八
中原菊次郎氏著	農村の更生を語る	價一、〇〇	〒八
古瀨 傳藏氏著	百姓だつて人間だ	價一、五〇	〒一三
相原言三郎氏著	自力に依る農村更生の道	價一、二〇	〒一〇
竹原 貞治著	農業の認識と更生の道	價 八五	〒八
田村 浩氏著	自力更生と農村救濟案	價 五〇	〒四
大杉 房吉氏著	農村問題の再吟味 農村の生くべき道	價一、二〇	〒一〇
丸山 義二氏著	農村を語る	價一、二〇	〒一〇
石田 傳吉氏著	地方青年の覺醒	價一、五〇	〒一〇
江坂佐太郎氏著	園藝農產物販賣の合理化	價三、〇〇	〒一四
鈴木 富治氏著	農村の副業	價二、三〇	〒一三
山本 哲夫氏著	セルリー栽培の實際	價一、二〇	〒一〇
馬 俊雄氏著	アンゴラ兎の飼ひ方	價一、二〇	〒一〇
林原 秋男氏著	隼人瓜栽培の實際	價一、二〇	〒一〇
中山 文一氏著	蔬菜栽培要訣	價一、〇〇	〒八
波多腰 節氏著	蔬菜園藝	價一、〇〇	〒八
坂井辰三郎氏著	作物病理論 上下	價一、〇〇	〒八
坂井辰三郎氏著	作物害虫論 上下	價一、〇〇	〒八
稻葉甲午郎氏著	畜產學	價一、〇〇	〒八
高岡 好廉氏著	農產製造學	價一、〇〇	〒八
中島 靜夫氏著	經濟本位 榮養料理	價一、三〇	〒一〇
川崎 甫氏著	おいしい漬物のつけかた	價一、〇〇	〒八

農業經濟研究會	農家負債整理組合法問答	價一、五〇	〒一四
田村　浩氏著	農漁村共産體の研究	價一、二〇	〒一〇
吉地昌一氏著	田園の榮光	價一、二〇	〒一〇
上塚　司氏著	理想的農業國 デンマーク土産	價一、〇〇	〒八
谷本龜次郎氏著	農産物增收法	價　八五	〒六
江坂佐太郎氏著	新興の農村	價一、三〇	〒一〇
山崎延吉氏著	農道篇	價　五〇	〒六
岩槻信治氏著	米麥篇	價　五〇	〒六
市川實太郎氏著	蔬菜篇	價　五〇	〒六
市川實太郎氏著	果樹篇	價　五〇	〒六
安城農藝研究會	農藝寶典	價二、〇〇	〒一四
並木信政氏著	願屆書式大成	價　八五	〒六
帝國法律研究會	改正地方制度諸法規	價一、三〇	〒一〇
八住利雄氏譯著 關口晃南氏	羅文 シエークス譯註 ピヤ研究 四卷	價各一、三〇	〒各一〇
清水　清氏著	受驗參考 英語の正しき研究	價　八〇	〒八
川端千枝子著	歌集 白い扇	價一、〇〇	〒一三
松村又一氏著	古今民謠選抄	價一、八〇	〒一〇
金　素雲氏著	朝鮮民謠集	價二、五〇	〒一四
東京音樂研究會	模範教育唱歌集成	價一、〇〇	〒一〇
高橋　廣治氏著	實利採卵養鷄法	價二、八〇	〒一四
高橋　廣治氏著	百羽百成 人工育雛法	價一、八〇	〒一三
高橋　廣治氏著	人工孵化育雛法	價一、五〇	〒一〇
高橋　廣治氏著	孵化育雛實典	價　五〇	〒四
榎本　誠氏著	鷄の飼養管理	價一、五〇	〒一〇
榎本　誠氏著	斯うして育雛なさい	價　五〇	〒四
榎本　誠氏著	私の鷄舍のいろ〳〵	價　七〇	〒六
喜多村　修氏著	家禽病理治療法	價一、八〇	〒一〇
鈴木　史郎氏著	鯑の養殖法	價　八〇	〒六
米野與七郎氏著	鶖と七面鳥	價　九〇	〒六
木村　秀吉氏著	精神文化の諸問題	價一、九〇	〒一三
長澤　安弘氏著	歐洲巡遊と其印象	價一、〇〇	〒八
戶田　景明氏著	家相眞法	價一、一〇	〒一四
小平　久馬氏著	日本婚禮式	價一、五〇	〒一三
昇龍齋專之氏著	池の坊流花の生け方	價一、八〇	〒一三
中島　靜夫氏著	自家用食料品の製法	價　二〇	〒二
古川　辰藏氏著	子供洋服の裁方と縫ひ方	價　九〇	〒八
春秋園方圓氏著	茶の湯・盆石作法	價一、八〇	〒一四
木村　義雄氏著	將棋駒の歩みから新定跡 獨習圍碁 手ほどきから初段迄	價一、五〇	〒一三
東京圍碁研究會		價一、五〇	〒一三

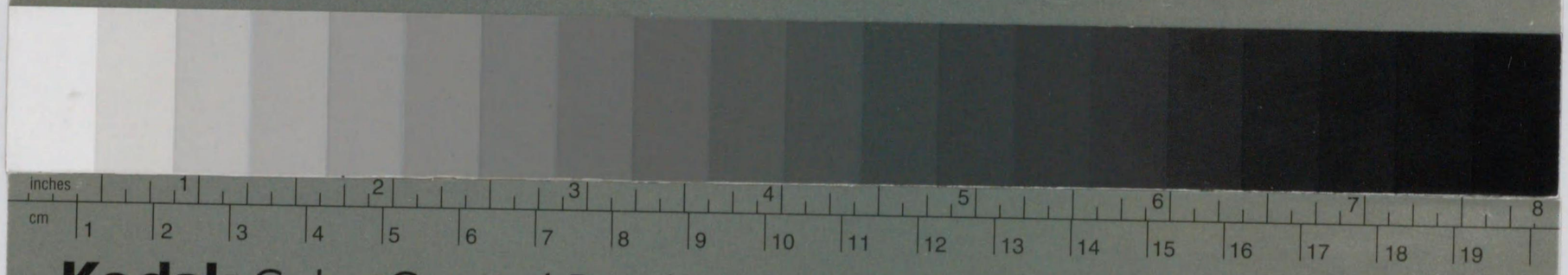
645
83

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black